

“惑星社会の諸問題”に応答するための“探究／探求型社会調査”

——「3.11以降」の持続可能な社会の構築に向けて——

新 原 道 信

目 次

1. はじめに——“惑星社会の諸問題への責任／応答力”
2. “探究／探求型社会調査 (Exploratory Social Research)”の構成——とりわけサルデーニャでの協業による多声の確保について
3. 「エネルギー選択, 市民社会, 生活の質」をめぐる対話——2012年8月2日, サッサリ大学地域研究所 FOIST 「35周年記念・大学の国際経験・第四回セミナー「Fukushima 原発事故: エネルギー選択, 市民社会, 生活の質」より
4. “惑星社会の諸問題”を引き受け／応答する“生存の場としての地域社会の学”へ——“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)”について

私たちは、グローバル化社会となった惑星で生活している。それは、外部の環境および私たちの社会生活そのものに介入していく力によって、完全に相互に結合していく社会であるが、しかし依然として、そのような介入の届かない本来の生息地である惑星としての地球 (the planet Earth) に拘束されているような社会でもある。社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界という、惑星としての地球の二重の関係は、私たちがそこで私生活を営む「惑星社会 (the planetary society)」を規定している。

変化のリズムの加速化、個人に要求される役割期待の多重／多層／多面性 (multiplicity)、そして記号としてのメッセージの氾濫によって、人類の歴史上、今までとは比較にならない程、私たち

の認知レベルおよび情動レベルでの体験は拡大している。かつて、個人や集団が自らのライフ・コースを確かめる拠りどころとしていた諸々の参照点は溶解しつつある。「私は誰?」という根本的な問いに自信をもって応答することが一層困難になっている。A. メルッチ『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』(Melucci 1996a = 2008 : 3)。

1. はじめに——“惑星社会の諸問題への責任／応答力”

本稿の眼目は、「3.11以降」の日本社会が直面している問題を“惑星社会の諸問題 (the multiple problems in the planetary society)”としてとらえ、問題に応答するための“探究／探求型社会調査 (Exploratory social research)”の具体的試みを提示することにある。テーマの背景には、A. メルッチ (Alberto Melucci, 1943-2001) の惑星社会論——“惑星社会の諸問題”への認識がある。“探究／探求型社会調査 (Exploratory social research)”は、メルッチそしてA. メルレル (Alberto Merler, 1942-) という二人のイタリア人共同研究者と筆者との間で錬成してきた調査研究の「エピステモロジー／メソドロジー」の総称である。この方法に基づき、持続する危機のなかで存続していける社会の方向性を示唆することを目的として、日本とイタリアで並行して行いつつある調査——「原発・震災」「エネルギー選択」等の問題への個々人の多重／多層／多面の応答に

関する調査からの知見を取り上げる。そこから、“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)” が持つ意味を把握する。

（“惑星社会の諸問題への責任／応答力” という「状況」）

日本の都市・地域社会研究者は、「阪神・淡路大震災」をひとつの契機として、ごくふつうの都市・地域住民たちの個々の微細な動きによって、新たな状態・新たな制度が創られていく“変化の道行き”を目のあたりにし、いままた、「東日本大震災」によって、より複合的な問題への応答が求められている¹⁾。

「原発・震災」「エネルギー選択」等の問題は、イタリア・ヨーロッパでも強い関心をもって受けとめられており、「日本の政治・社会状況」への注視がつづいている。その関心の背後にあるのは、「3.11は、[時代の] 裂け目 (spaccatura d'epoca/epoca di spaccatura)” の象徴であり、私たちが直面している地球全体の問題の核がある。このことが、(倫理にとどまらず) 論理的必然となった社会を私たちは生きている」という知覚である²⁾。

そう考えるとき、“惑星社会の諸問題への責任／応答力 (responsibility for/to the multiple problems in the planetary society)” という問題意識を抱いていた A.メルッチが、もし「3.11」の場に居合わせたとしたら、いかなる着眼と問題への応答をしていくのだろうかという想念が去来する。

イタリアのエミリア＝ロマーニャ州リミニで熟練労働者の息子として生まれ、ミラノ・カトリック大学で哲学を学んだメルッチは、カトリック青年運動に参加し、ポーニャ大学で臨床心理学を学ぶアンナ夫人と知り合った。そして国立ミラノ大学大学院で社会学を学んだ後パリに留学し、A.トゥレーヌ (Alain Touraine, 1925-) のもとで社会運動を研究すると同時に、臨床心理学の博士号を取得する。J.ハーバーマス (Jürgen Haber-

mas, 1929-) や Z.バウマン (Zygmunt Bauman, 1925-) との学問的交流を経てイタリアに帰国、サッサリ大学、トレント大学、ミラノ大学を歴任したが、2001年白血病でこの世を去った。新しい社会運動とアイデンティティの不確定性をめぐる現代社会理論の旗手として知られるようになる一方で、アンナ夫人との共同研究により“個々人の内なる社会変動 (change form, metamorphose)” に関する膨大な質的調査と精神療法／心理療法の実践の成果をイタリア語で作品化していった。

本稿冒頭で紹介したメルッチの著『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』(Melucci 1996a = 2008) の「イントロダクション」の一文は、私たちが置かれている「状況」と「条件」の見事な“粗描 (abbozzo)” となっている。

前半部分には、「可能性」と「限界」という二重性を持った惑星社会に生きるという「状況」についての認識がある。後半部分では、「認知レベルおよび情動レベルでの体験」の拡大によって、自らの参照点が「溶解」しつつある「惑星社会における人間」の「条件」についての理解がある。

ここでの「状況 (situazione)」とは、situs あるいは posita, つまり位置・もののあり方・置かれ方・配置・ひとの姿勢・姿態とかかわるものであり、「条件 (condizione)」は、con-dicere (いっしょに言う), convenire, stabilire di comune accordo, つまり同意・一致・契約 (同意のうえで決める) とかわかり、どちらの言葉にも、人間の主観／主体的側面と客体的側面があるが、「条件」には、相互承認／間主観の契機がある。

メルッチは、『プレイング・セルフ』のなかで、システム化の網の目と「物理的な限界」のなかで動き続けざるを得ない個々人がその「条件」下で問題に応答するプロセス——「多重／多層／多面性 (multiplicity)」をもった自己の「アイデンティゼーション (identization)」に着目している。しかしここで力点が置かれていたのは、「可能性」の拡大の側面だけではなく、私たちが依然として

「介入の手が届かない本来の生息地である惑星としての地球」に拘束されていることであった。そして、「惑星社会」に生きる人間の「条件」として、自らの限界や制約を「引き受け (responding for)」, 社会関係のフィールドに対して「応答する (responding to)」という「責任／応答力 (responsibility)」を強調した (Melucci 1996a = 2008 : 68)。

すなわち、メルッチは、〈社会的行為のためのグローバルなフィールド〉とその〈物理的な限界〉という、二重の関係をもつ“惑星社会に固有の多重／多層／多面の問題を引き受け／応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society)”ことの必要性／必然性を示唆し、可能性／制約のなかで現在を生きるものの〈内的で微細な変化／他者との交感／集合行為〉の動態を把握しようとしたのである。

(“生体的関係的カタストロフ”を“引き受け／応答する”という「条件」)

そのメルッチが、「惑星社会」を生きる人間の「条件」に関して、2000年5月の一橋大学での講演において、会場とのやりとりのなかで、以下のように語っている。「いまやカタストロフは、単に自然の問題ではない。単に核の問題でもなく、人間という種そのものが直面する、生体そして関係そのもののカタストロフとなっている。いわゆる『先進社会』のより先端部分で暮らすひとたちの半分が『悪性新生物』という異物によって死ぬ。さらにその半分は、心疾患で死ぬ。これはまさに、現代社会のシステムがそこに暮らすほとんど四分の三のひとびとの生体に社会的な病をもたらすという劇的な収支決算となっている。この個々の生体のカタストロフという面から現代社会をとらえなおさねばならないとわたしは確信している。まだ多くのひとによっては語られていないことなのかもしれないが、この生体的関係的カタストロフは、まさにより深く根本的なものだ。」

(Melucci 2000g) (新原 2010 : 51-61)

この言葉は、社会システムの危機が、自らの身体に“埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろし”ているという自覚のもとに発せられた言葉だった。現代社会に固有の「破局 (カタストロフ)」とは、自然や社会といった「大きなもの」の話にとどまらない。「思想」や「価値」や「秩序」の話だけでもない。個々人の生身の身体そのものの“心身／身心現象 (fenomeno dell'oscurità antropologica)”³⁾の話である。この「生体的関係的」、すなわち、社会システムそのものと、システムの統制の対象となっている個々人の身体レベルまで含めた諸関係における“内面崩壊／亀裂 (degenerazione umana/spaccatura antropologica)”から、現代社会の意味をとらえかえさねばならないという指摘が、予見的な意味を持っていたことは比較的早くに明らかとなった。

この講演の翌年の「9.11」から継起する「アフガニスタン」「イラク」「世界金融危機」、さらに「3.11」と、“未発の瓦礫 (macerie/rovine nascenti)”は“破局へと至る瓦礫 (andare in rovina)”へと姿を変えた⁴⁾。地域社会は根こそぎ破壊され、大震災後の格差の拡大に直面している。一年以上経っても、毎日、「仮設住宅」から通い、自力で瓦礫の始末、さらには遺体捜索を続けている。しかし、見通しはまったく立たない。「被災地」には「保障」をめぐる、指定される家と指定されない家の恣意的な境界線が引かれ、住民は分断される。「うっすらとした不安」を抱えつつ暮らす都市住民は、一度でも被災地に足を運ぶと、現地と都市との乖離・隔絶に心的外傷を引き起こす。状況に怒り、原子力政策は変わらざるを得ないと思った。しかし、第二次大戦後をアメリカの軍事戦略への依存、「核のカサ」のもとの経済成長主義、核エネルギーへの依存といった背景を考えると、事態は簡単ではないことを体感し、立ち止まり、悩む。「いままでと同じではない」「変わっていくべき」はずなのだが言

業に出来ない。不確かな未来を「予感」しつつ生きるつらさがある。「3.11」によって、可視化した「[時代の] 裂け目」は開かれたままで、むしろこの“危機の時代 (a critical moment)”を常態として生きていかざるを得ない。

メルッチの視点から、「3.11」と“生体的関係的カタストロフ”との関係をさらに考えてみることにしよう。放射能汚染、大地震、噴火が“生身の現実”である列島に生きることは、認識すべき「状況」のひとつであるが、こうした客体的状況以外にも、危機の時代に直面する側の「条件」、すなわち“生体的関係的カタストロフ”の問題がある。たとえばいま私たちは、新たな大震災を恐れているが、火山の噴火にはそれほどの注意を払わない（「焦眉の問題 (urgent problem)」としての位置付けは弱い）。しかし富士山の噴火はわずか300年前に起こったことだし、雲仙普賢岳の火砕流発生や三宅島の噴火は、つい「最近の出来事」だ。9世紀には、多発的に地震・噴火が起こっていたが、史実に残る「希有な天変地異」と類比されるべき「(これからの／いますでに始まりつつある) 地殻の大変動期」は、今日の自然科学にとっても「前人未踏の地 (no-man's-land)」でありつづけている。ではごくふつうの人間は、“見知らぬ明日”をどう生きるのか。仕事や結婚といった日常生活は、いままでは遠き“端／果て”にあると思っていた“惑星社会の諸問題”を無視しては成り立たない。突然やって来る「ある日」は自分たちのかたわらにすでに在って、息をひそめて出番を待っている。

他方で、「原発問題」については、「原発事故をもう終わったこと、昨日のこととしていく社会統制の力が働いている」とメルッチだったら言うであろう。しかし、「原発問題」は、いままさに可視化され、これからも持続していく。放射能は、物質と生態系の循環のもとで、風に運ばれ、雨や雪に付着して、私たちのもと、大地のもとにやって来る。恵みの土や泥は、放射能の受け皿へとそ

の姿を変える。天然の鮎やヤマメ、日本の農山村を豊かな恵みで満たした河川は、ひとたび汚染されれば、“異物 (corpi estranei)”は長きにわたって付着し、完全な「徐染」など出来るものではなく、「立ち直る」などとは簡単には言えない「状況」に直面している。

2011年8月3日に、イタリアのサッサリ大学で「3.11以降の日本社会」についてのセミナーで報告した後 (Niihara 2011)、「株の暴落」とイギリスでの「貧民の暴動」に直面しつつ、A.メルレルとの間でも対話を行った。すなわち、「3.11以降」の日本の政治・経済・社会の迷走と混迷は、一国家・社会の問題にとどまらない。「惑星社会 (the planetary society)」においては、実体化し資本化した情報 (ゲノムやナノも含めて) 社会システムへの「ここにもないほめ言葉 (lodi fittizie)」が持つ脆弱さが露呈している。そこで私たちは、同時的でありながらも早い「コミュニケーション」が「株の暴落」をもたらず一方で、統治不可能な危機を、“異物への過剰な拒否反応 (strafobia)”によって（「周辺化 (emarginazione)」するだけでなく「根絶・排除 (esclusione)」することで）回避しようともがいている点に着目した。第二次大戦後、膨大な時間とエネルギーと対話によって建設されてきた社会保障の背後にある「ヨーロッパ性」の根幹が揺るがされている。「安全」を「保障」しているかに見えたグローバル・システムが、実は“見かけ倒しの拙速社会 (società fittizia e rapida)”であることが顕わとなったのである。

（「3.11以降」——持続する危機のなかでの“生存”の問題）

それでは、危機が常態化していく社会がそれでも持続していく「条件」とはいかなるものとなるのだろうか——こう考え、本稿のタイトルには、「3.11後」ではなく「3.11以降」という言葉を採用した。「以降」には、メルッチが言うところの「劇

的な収支決算」の状況が持続していくという意味がこめられている。つまりは、「突然、想定外の事件が起きたが、困難をのりこえ、『もとどおり』のありかたへと復興していく」という認識とはことなる見方である。すなわち、「震災、津波、原発事故」で、日本社会とそこに生きる私たちの状況・条件が変わってしまったのではなく、実はすでに存在していた“多重／多層／多面の問題 (the multiple problems)” が顕在化した。「3.11以前」にも“未発の状態 (stato nascente)” として存在し、実はそれが、「客観的現実のなかにすでにとっくに存在」していたのだと認識せざるを得なくなったのが、「3.11以降の状況」である。

「3.11」によって、中央政府による開発という中央集権システムに疑義がつきつけられた後、公共事業で「もとにもどす」のか。それとも、「潟」や「浦々」に潜む地域小社会の主体の潜在力に着目していくのか（新原 2011e）。この問いの文脈で、玉野井芳郎の生命系のエコノミーを再考したい。玉野井が東京大学から沖縄国際大学に赴任して、沖縄の路地裏（すじぐわー）で生きられている経済（家政／オイコノミア）を体感していった“道行き・道程 (passaggio)” そのものを、津々浦々の地域小社会で、避難した家族が暮らす「異郷」の地で辿り直す。玉野井が思索をめぐらした時代からさらに貨幣経済の不確実性は露呈しており、いまいちどの配置変え (reconstellation/ricostellazione), メルッチの言葉に重ねていえば「惑星社会のオイコノミア」を考えることが求められている。もはや「持続可能性」は、地域社会の住民すべてが直面している“生存 (sopravvivenza)” への根本的問いかけと、分かちがたく結びついているのである⁵⁾。

（危機が持続するなかでの〈社会的発明〉）

そしてまた、私たちがいま直面している「統治性の限界」「不安定性」「不確実性」の“根 (radice)” はどこにあるのか。根こそぎの「居なが

らの出郷」「心情の出郷」（石牟礼 1972：302-303）が“多重／多層／多面の問題”として多発しつつづける「状況」に対して、私たちは、これから様々なかたちの自らの「出郷」とともに生きる道を練り上げていかねばならない。問題は、“根の異郷化／流動化 (spaesamento/ fluidificazione delle radici umane)”, すなわち「固有性の消失」から「画一化」へという単線的な経路 [ルート] ではなく、“根の流動性／重合 (fluidità/compositezza delle radici umane)” というかたちで捉えかえすべきなのであろう。

都市・地域社会学の文脈で言えば、地域社会の津々浦々、都市のひとつひとつのストリートや団地や公園で立ち現れる“衝突・混交・混成・重合”のダイナミズムに即しての、異質性を含み込んだコミュニティ形成の課題がよりリアルな問題として立ち現れたと言えよう。吉原直樹が指摘しているような「異質なものとのお会い・対質を通して内からの動的な関係を築き上げていく」ところの「創発的なまちづくり」へと向かわざるを得ない（吉原 2011：234）。

だとすると、いま私たちは、初期シカゴ学派のように、living society (city, community and region) のなかに降り立つしかない。パークやバージェスが、学生も含めて社会学や社会調査の理論と実践について膨大な議論を積み重ね、フィールドで出会った“探究／探求”すべき問題に導かれ、調査方法を生み出していったように、そしてまた、「社会学上の新しい事実発見と解明が、都市、社会、あるいは個別ケースの当事者に『コンサルテーション』の機能をもつことに他ならない」という「臨床社会学」を構想していった（奥田 1990：234）ようにである。

構築されるべき持続可能なコミュニティが、これから成長／生長していくものであるとするなら、パーク、バージェス、マッケンジー等が構想した「人間生態学 (Human ecology)」「人間のコミュニティ研究に関する生態学的アプローチ

(The Ecological Approach to the Study of the Human Community)」の再考／再構築も必要となろう。メルッチの議論と組み合わせれば、土地や自然に強く拘束される存在であった人間が農村コミュニティから相対的に自立した都市コミュニティを形成し、そこでは人間と人間の関係、象徴的相互作用の次元が重要となった。この流れの果てに、立ち現れている“生体的関係のカタストロフ”の時代の人間生態学はいかなるものとなるのかを再考し再構築する必要がある。意識や心理の“深層／深淵”の次元まで含めた社会的諸力の関係、境界線の束も含めた学とならざるを得ないという点では、メルッチが言うような「内なる惑星」の問題をも含めざるを得ないだろう。

本稿のタイトルは、W.F. ホワイトのアメリカ社会学会会長就任演説「人間の諸問題を解決するための社会的発明」へのオマージュとなっている。ホワイトは、「外から」「上から」の〈介入〉——「どんな種類のものであっても、外部から組織やコミュニティの内部にもち込まれる、ある何ものか」に対して、「外部からのいかなる直接の影響にもよらずコミュニティもしくは組織に出現する可能性をもち、またしばしば現に出現する」ところの〈社会的発明〉を対置した(Whyte 1981 = 1983 : 233-234)。調査研究の方法そのものを眼前の問題に回答するなかで革新し、その方法自体を〈発明〉していくという発想は、トゥレーヌの「社会学的介入」からの「離脱」を図ったメルッチの「エピステモロジー／メソドロギー」と共鳴する点が多い。

しかしここでは、先ほどの「持続可能性」の論点と重ねあわせ、吉原の言う「異質なものととの出会い・対質」に注意を払いつつ、〈外〉「上」対「下」「内」という対立図式そのものをゆるがす根本的な問題提起)として、〈危機が持続するなかでの社会的発明〉を構想するという認識のもとに先へと進むことにしたい⁶⁾。

(限界を受け容れる自由から“創起する動き”)

メルッチは、「創発」への道を、「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由」として表現した⁷⁾。すなわち、「可能性のフィールドが、ある一定の範囲をこえて拡張」し、「選択、不確実性、リスクといった問題」が噴出し、「社会が自らを破壊できる力を備え、何ら保証もない選択に個人の生活が依存しているような時代」において、意識的に自らの「限界を受け容れる自由」(Melucci 1996a = 2008 : 78-79)を創造する道である。そして、これから持続していくであろう道、「このような前人未踏の地(no-man's-land)では常に起こることだが、ある人が発見するものは、いまだ明確な形を持って展開されていないだけに、流動的な状態のまま残されている」のであり、そのような「創発」的なやりくりのプロセスがもたらしてくれる成果については、「いまだ構築の途上にある自由」「わたしたちすべてが変化に対する責任と応答を、自らに由る形で引き受けるという意味での自由に」委ねるしかないのである(Melucci 1996a = 2008 : 7)。

惑星社会の諸問題を引き受け／応答するなかで生まれる「創発(emergence)」の道とは、危機の瞬間に“居合わせ”、その特定の時と場でのみ想起される“智恵(saperi)”を突き合わせていく動きのなかでこそ“創起する動き(movimenti emergenti)”であるはずだ。その道は、ごくふつうのひとびとが危機の瞬間において様々なことがらを想起するという集合行為、個々人の応答のなかに現れつつある“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動(movimenti nascenti)”と、そこから“創起する動き(movimenti emergenti)”が持つ意味を把握し、常態化する危機のなかで存続可能な社会の方向性を示唆することへと向かっていく。

この“創起する動き”への道、個々の場において、様々な異なる「グローバル化」の構造と動態を視野に入れながら、小さく、いまだ十分に形を

とらない現実に耳をすまし、その背後に横たわる大きな構造変動のプロセスや微視的な現象の双方と結びつけて意味付与するという「未完」で「挑戦的」な多重／多層／多面の試みのひとつの試みとして、筆者の場合には、イタリアの都市・地域社会研究者・活動家たちとの協業ですすめてきた“探究／探求型社会調査 (Exploratory Social Research)”の一端を以下で紹介し、考察の起点としていきたい。

2. “探究／探求型社会調査 (Exploratory Social Research)”の構成——とりわけサルデーニャでの協業による多声の確保について

筆者は、1985年より「沖縄・広島・長崎における平和運動の組織と思想」についての調査研究と同時に、イタリアの社会運動研究に着手した。米軍原潜基地の存在によりヨーロッパの反核平和運動の焦点となっていたサルデーニャ州での集中的なフィールドワークを立案し、1985年より予備調査（イタリア人研究者に頼んで基礎資料のリスト化と資料収集）、1986年に手紙にてキーパーソンに連絡をとり、1987年にはインテンシヴなインタビュー調査と運動団体への参与観察を行った。引き続き、1988年10月から1989年12月にかけてサルデーニャに長期滞在し、参加型調査を行い、この段階までに築いた人間関係を土台として、1990年より2012年現在に至るまでサルデーニャ・イタリアへの定期的な「帰還」を繰り返している。とりわけイタリアの間国境・島嶼地域における調査を継続的に行い、「地域住民の意識、集合行為、社会運動と地域社会の内発的発展」をテーマとした研究、近年においては、持続可能な「21世紀“共成”システム構築」を目的とする研究へと深化させてきた（新原 2007c）。調査地の言語であるイタリア語で講義・シンポジウム・セミナー等での報告と論文の発表を継続し、その結果、異なる立場から、地域社会の現実の変化を理解している識

者との間で、定期的にコメントを交換しつづけることになり、それぞれの識者の理解のありかたとその変化の理由を双方向的に対話・比較することを通じて、沖縄・日本とサルデーニャ・イタリア・ヨーロッパの社会変動と“個々人の内なる社会変動”を把握に努めてきた⁸⁾。

このなかで師友となったサッサリ大学教授のA.メルレル (Alberto Merler) とミラノ大学教授のA.メルッチ (Alberto Melucci, 2001年に白血病で死去) には、理論と調査方法の双方で多大な影響を受けている。メルレルとの間では、“コミュニティを基盤とする参加型アクション・リサーチ (Community-Based Participatory Action Research)”⁹⁾ を、メルッチ夫妻との間では、“療法的でリフレクシヴな調査研究 (ricerca terapeutica e riflessiva, Therapeutic and Reflexive Research)”¹⁰⁾ の錬成につとめてきた。

（“社会学的探求”と“探究／探求型社会調査”）

“社会学的探求 (Sociological Explorations/Esplorazioni sociologiche)”¹¹⁾ は、メルッチとメルレルとの“共創 (cocreazione)”のなかで紡ぎ出された言葉であるが、この前提には、《〈モノ (物財) - コトバ (意識, 集合表象) - ココロ (心身 / 身心現象)〉の“境界領域”にある〈コトガラ (事柄の理 (= ragioni di cosa/causa))〉を“探究／探求”する営み》としての学問 (総合人間学としての社会学) がある。地域社会研究は、《社会構造の“移行, 移動, 横断, 航海, 推移, 変転, 変化, 移ろいの道行き・道程 (passaggio)”に着目し、そこに生起する“複合・重合”的で“多重／多層／多面”の“事柄の理 (= ragioni di cosa/causa)”を捉え、個々人と社会の“メタモルフォーゼ (変異 = change form / metamorfosi)”の条件を析出する営み》である。“探究／探求型社会調査 (Exploratory Social Research)”は、「社会」を対象とした“探究”の「メソドロジー」を基本としながら、その背後には、人間と文化そ

のもの“根の流動性／重合性”の“探求”の「エピステモロジー」が存在している¹²⁾。

以下では、“探究／探求型社会調査 (Exploratory Social Research)”の一環としておこなわれた2012年8月のサルデーニャにおける「フィールドワーク／デイリーワーク」を紹介し、考察をすすめていきたい。

メルッチは、『創造力——夢、話、プロセス (Creatività: miti, discorsi, processi)』(Melucci 1994b)において、対話的な“想像／創造”の意味に着目した。そして、病とたたかいつつの旅であった2000年5月の日本での講演においても、「これはレクチャーであるというより、非公式なおしゃべり (chiacchiera) でありたい」と言い、思い通りには動けない「条件」の下での「対話・談話 (dialogo e discorsi)」のなかから“臨場・臨床の智”を創成することを試みつつけた。

1987年以降、社会調査の方法としての「対話・談話」によって、定期的にイタリア・サルデーニャにおいてセミナーや講義・会合等を続けてきたことで、インタビューすべき相手が自ら会場にやって来て話してくれ、会合の後また機会をつくってくれ議論を深化させることが出来ている。以下に紹介するものは、まずはその場に“居合わせ (Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)”，あらゆるものを集め、記録・記憶し (keeping perception/keeping memories)，“対話的にふりかえり交わり (fare riflessione e riflessività)”，複数の目で見て複数の声を聴き、複数のやり方で行いつづけてきた「フィールドワーク／デイリーワーク」のひとつである¹³⁾。

3. 「エネルギー選択、市民社会、生活の質」をめぐる対話—2012年8月2日、サッサリ大学地域研究所 FOIST 「35周年記念・大学の国際経験・第四回セミナー「Fukushima 原発事故：エネルギー選択、市民社会、生活の質」より

3-1. 1987年の想起と2011年の微細な動き¹⁴⁾

2012年8月の「対話・談話」の背景となっている〈1987年と2011年のサルデーニャ・イタリアにおける「問題への応答」〉について確認しておきたい。チェルノブイリの事故の翌年である1987年当時のサルデーニャは、ヨーロッパ有数のリゾート地と NATO の演習場が隣接し、北東部に位置するラ・マッダレーナ群島には米軍の原潜基地が建設され、放射能による海域の汚染が危惧されていた。チェルノブイリの事故後、「イタリアは安全だ。ただちに健康の問題はないが、子どもはなるべく外出しないほうがいい」というマスコミ報道が流され、他方で、事故直後に販売が禁止されていた生鮮野菜や牛乳に対する恐怖感とともに、「先日の雨や、いま食べているパスタから、〇〇ベクレルが検出された」という情報が、研究者や環境保護団体などから届いていた。

筆者は、サルデーニャ北部の中核都市サッサリに長期滞在し、「1987年の原発停止をめぐる国民投票」運動を主導した若手知識人グループへの参与観察をおこない、彼らの会議や集会などに参加し、行動をともにした。そして国民投票の結果、イタリアのすべての原子力発電所が廃止された。

イタリア・ヨーロッパ社会にとって、1987年と2011年の二つの国民投票（そのいずれもが原発停止とかかわるもの）は、きわめて大きな「事件」であった。「1987年」の国民投票成立以後、「目に見える社会運動」(メルッチ) はもはや顕著なものではなくなり、イタリアの諸地域においても「個人化」と「新自由主義化」の傾向は強まっていくように思われた。サルデーニャでは、「中道

右派か中道左派のどちらかのグループから州代表（知事）が選出される」という図式が崩れ、インターネット企業ティスカリの創業者 R. ソル（Renato Soru, 1957-）、さらにはメディア王でもあるイタリア共和国首相ベルルスコーニ（Silvio Berlusconi, 1936-）の強力な支持を得た「無名の新人」U. カッペラッチ（Ugo Cappellacci, 1960-）が新たな州代表（知事）となった。しかしながら、イタリア社会の複合的な危機が深刻化するなかで、大学や病院などの公共施設の「民営化」の方向に反対する運動が再び活性化し、とりわけサルデーニャにおいては、牧畜業者によるデモを学生・若手大学教員が支援するという、いままでにないクロスカルチュラルな運動の形態が見られるようになる。

さらに、「3.11」直後の2011年5月には、サルデーニャへの原発建設を主張するベルルスコーニ首相への反対運動がサルデーニャで起こり、住民投票により原発建設反対が決定された。同年6月には、「『3.11』の影響はあれども（投票成立に必要な）50%の投票率確保は困難」との予測が覆され、（投票権を有する）国民の54.79%が投票、原発凍結賛成票94.05%で、「原子力発電の再開を凍結する国民投票」が成立した。他方で、イタリア内外の研究者たちは、1980年代から現在に至るイタリア社会の“変化の道行き（passaggio）”の理解についての理論的・実証的困難に直面せざるを得なかった。

チェルノブイリ以降の日常を生きたひとたちは、ずっと声をあげて運動をしつづけたわけではない。しかし、声を発し、直接的な行動をとらなかつたその間も、日々の暮らしをたたかい、目に見えて言葉や行動をあらわしていないときでもまた、いつでも動けるような状態を保っていたということになる。ごくふつうのひとたちの、微細な動きが危機の瞬間に結晶化していく「条件」としての「限界を受け容れる自由」「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由」だ。危機の瞬間

に何ごとかを想起し、さっと身体が動くということ。ある特定の瞬間の集合行動と、“個々人の内なる社会変動”の“道行き・道程”とは、どのようにつながっているのだろうか？

1987年と2011年の二つの国民投票における集合行為は、「市民生活に直接関係する諸問題に、行政も政党も労働組合も十分に対応することができないでいる状況の中でせっぱつまって」（日高1986：129）のものと考えられる。現代社会における数々の社会運動と諸個人の深部からの要求を結びつけて理解しようとした A. メルッチは、この点に関して、「社会運動は、直接的に体験される日常生活と社会システムの間に位置する領域であり、その社会のもっとも奥深くにある知のメカニズムにふれるものであり、社会のフロンティアにおける変化と同時に生起するものである」（Melucci 1996a = 2008：202）と述べている。メルッチが言うところの「社会のもっとも奥深くにある」「フロンティアにおける変化」、すなわち〈構造そのものが流動化したまた再構造化するという“変化の道行き（passaggio）”に着目する〉という視点を持ちつつ、2012年8月のセミナーに臨んだ。

3-2. 「対話・談話」を喚起するための報告

サッサリ大学は、地域研究所 FOIST の35周年記念行事として「大学の国際経験」に関するセミナーを、ブラジル、アイルランド、ハンガリーなどから講師を招いて行ってきた。そして第4回セミナーとして、「福島原発事故」の問題をとりあげることとなった。基調報告を筆者が担当し、地元からは3名の報告者、そして議論という構成であった。夏期の8月2日開催という困難な日程であったのにもかかわらず、サッサリ大学の主要な研究者、大学院生・学生、新たな設立された内陸部の都市ヌオロの大学関係者、環境問題や社会的経済とかかわっている著名な知識人・運動家、市民が参加し、報告後の議論はきわめて興味深いも

のとなった。

あらかじめ準備したイタリア語原稿 (Niihara 2012) では、基本的データや問題の構造についての理解の提示を前提としたうえで、「『遠い』と感じられている『地球の裏側の事件』が、実は、サルデーニャの人々にとっても切実な“惑星社会の諸問題”としてつながっている」という観点から、1. Fukushima の現況、2. Fukushima 問題の構造、3. “惑星社会の諸問題を引き受け／応答する”人間の「条件」についてという組み立てをしていた。しかし、地元新聞『ラ・ヌオヴァ・サルデーニャ (La Nuova Sardegna)』の取材や、セミナー開始前になされた聴衆との会話のなかで、日本社会の基本的な構造と「3.11以降」の推移に関して十分な情報と理解があることが判明した。とはいえ、言語・文化、社会的文脈のちがいなども含めて、“伝承・伝達 (trasmissione)”し得ることは、十分に多重／多層／多面的というわけにはいかず、伝える側の限界を聴き手の側の想像力によって補ってもらわなければならない。そこで、おたがいの理解の限界に対して歩み寄るかたちで、2011年3月以降のサルデーニャ・イタリアにおける「環境・エネルギー政策」問題と日本の「原発・震災」問題への個々人の応答に関して、より各自が比較し想起してもらえる内容へと組み替えを図った。それゆえ、口頭報告で補った部分は、実証的な見地からすれば、“ぶれてはみ出す”ところのある価値言明的な発言も含まれており、その偏りを聴き手が補うことを前提としたもの、すなわち、「対話・談話」による相補的な行為を前提したものとして始まった。以下、聴衆の様子を見ながらとりわけ強調して話した部分を再現してみることとする。

(「草の根はどよめく」¹⁵⁾)

「一度決めたことはなかなか変えられない」は組織 (人) の言葉だ。社会の「草の根」として日々を奮闘する「ごくふつうのひとびと

(la gente, uomo della strada, ordinary simple people)」は、「たしかにそうかもしれない」と疑問を抱きつつも、日常の課題に追われて暮らし、「きっとこれでよかったんだ」と自分に言い聞かせる。しかし、突然、うっすらと感じていた不安、未発であったはずの事件が現実のものとなり、せっぱつまって、「やはりおかしい!」「いてもたってもいられない」となる瞬間がある。「草の根はどよめく (risuonando “l'erba pensante”)」のだ。

2012年は日本の各地で、「日本でもっとも暮らしやすい」とされる福井県の大飯原発再稼働 (「3号機の再起動」) 反対や、「癒しの島」とされる沖縄への軍用輸送機オスプレイ配備に反対するデモが立てつづけに行われている。軍事輸送機オスプレイは、東北から九州の6ルートで飛行訓練をおこなう予定だ。モロッコやアメリカで起きた墜落事故が、これらの地域で起こらないという保障はない。しかし、日本政府は、「日米地位協定があるので仕方ない。できるかぎりは配慮する」とだけ言い、「人の壁」を前にしても、この「現実路線」を変えようとはしない。決して「過激なひと」ではないはずだった仲井眞弘多 (なかいまひろかず) 沖縄県知事が、「このままオスプレイを配備するというのなら (県民による) 基地閉鎖もありえますよ」と、「国の決定」に対して半ば「ケンカ腰」で声を発したのは、背後の住民のうめき声、「草の根のどよめき」が、背中に突き刺さっているからではないか。1995年の少女暴行事件と「人間の鎖」に後押しされ、普天間基地移設のために声を枯らし身を削った大田昌秀知事 (当事) のように。

「変えようとはしない」のは原発政策も同じだ。ごくふつうのひとたちが、いてもたってもいられずに、総理に声が届く場所にやって来て、手作りのプラカードを持ち寄り声を

あげた。毎週金曜日の国会議事堂・首相官邸前のデモは、大飯原発3号機再起動前日の6月29日には20万人（主催者側の発表による）にも達した。

「ここで声をあげないと」「一国民として参加しています」「永田町に30年以上いても、こんなのははじめてだよ」「自宅がホットスポットになって他人事ではないと思ってここに来ました」という、国会議事堂前に集まる様々な声を聞きつけた野田首相は、ただ一言、「大きな音だね」と言った。この非意識的な発言は象徴的な意味を持っていたのかもしれない。せっぱつまって、ぎりぎりのところから、焦眉の問題に対して発せられた声は、単なる音、騒音として「処理」されていく。しかしその一方で、伏流水のように社会の“深層／深淵”において、四方八方へとちらばりつつ、しかし危機に対する共通の想念を持ち、落ち着き整然とした“雑唱”のなかで起こっているのは、“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)”，すなわち、一者と二者と三者の間の“化学反応／生体反応 (reazione chimica/vitale)”だ。

(喪失の記憶のなかのコミュニティ)

「森の木が切られるのは、我が身が切られるようだ」と言ったのは、日本の博物学者南方熊楠 (1867-1941) だった。いま日本列島では、「身を切られる」思いで「出郷」してきたあまたのひとが、うめき声をあげつつ暮らしている。その情景は、「居ながらの出郷(者)、心情の出郷(者)」（水俣病のなかでうめき声に背中を押され患者の奥底からわきあがる「故郷という）出奔した切ない未来」に関する声なき声を描き遺した作家・石牟礼道子 (1927-) の言葉と、なんとという符合を失っていることか (石牟礼 1972 :

302-303)。

原発から5 km圏内で警戒区域に指定された福島県双葉町の「出郷者」の「心情」そして「未来」に想いを馳せる。土地の「未来」を考え、「よかれ」と思って「現実路線」の原発推進政策を選択していた／せざるを得ないと考えてきた井戸川克隆町長は、あの「灰」を見て、全町民避難へと身体が動いたひとりだ。「いろんな苦労があるけれど、町民にはとにかく（双葉町から）離れていただきたい」。そしていま、「仮の双葉町」が、埼玉県加須市に作られている。責任を問われる筋合いのないひとたちが、「まったく先祖には申し訳ない」と言う。帰る場所などない。福島見内と県外の「出郷者」たちの「分断」は、国家的・社会的に造られたものだ。しかし、てんでんバラバラに意見がわかる町民と町長の間には、共通の喪失の記憶がある。あの「にぶい音、小さな、大きな塊が静かに空から降りてくる。死の灰だなど思いました」。ここには、その当面の意見の不一致や対立を含めて、“喪失の記憶のなかのコミュニティ (comunità nelle memorie della perdita)” が存在している。

その町長は、全国の原発立地自治体の長の前で向きを変え、顔を見ながらこう言った。——「細野・原発事故相は、(原発再稼働にむけて) しっかり責任をとるなんて簡単に、やさしい言葉、みなさんに言ってますけど、われわれにとってはとんでもない。いま置かれている姿は、棄民、棄てられた国民であります」。町長は、“[鳴いて撃たれるキジのような] 攻撃されやすさ／傷つきやすさ (vulnerability)” で身を投げ出し、町民からの批判に撃たれつづけ、その一方で、中央の政治家には「ふざけるな！」と声を上げた。その背中には、「障害者の母を連れて自由には動けない、最後にはもう一度夢を見て生活をし

たい」という住民の声が突き刺さっている。

(閉じない循環の切断)

私たちが直面している「[時代の] 裂け目 (spaccatura d'epoca/epoca di spaccatura)」の具体像をさらに見てみよう。たとえば福島・飯館村の生産-生活-廃棄などを含めた循環の系と生産・生活様式の持続可能性は、放射性廃棄物の問題に対する対策を十分にもたないエネルギーの生産様式である原発の事故によって完全に切断・破壊された。数千年の時間の流れで生存が確保されてきた人間のつらなりと、30~40年程度の耐用年数で使用される原発がもたらす消費の当事者である人間が生産してしまった負の遺産とのバランスを比較してみるとよい。

「自分が住む場所の近くに建てられるのには反対したいが、原発はどこかになくてもならないものだ。いまの消費生活をやめられない」を思うひとがいること自体も、社会的に造られてきた事実のひとつだ。こうした判断が成立するには、征服されるべき「荒野」が存在する必要がある。植民地と市民社会、農村と都市の間には隔絶が存在していた。しかしいま、「世界都市」には「荒野」で生まれた人々が流入し、また、たとえば熱帯雨林の破壊によって生み出された環境の異変に直面している。つまりは、「荒野」からの照り返し、しっぺ返し、逆流が不可逆的に起こりつつある。ひたすら「荒野」を探し求めるかたちで拡大してきた近代社会システムは、一度始めてしまったものを途中で停止することがきわめて困難な官僚機構もまた生み出した。この意味で近代社会システムは、「荒野の蕩尽」という方向性に加えて、ひとつの方向性を定めたらその自己運動のシステムの根本的な改変がきわめて困難という特徴を持っている。近代社会システムの「模範解答への過

剰適応」の果てに、いま私たちは立っている。

モダニゼーションの果てのグローバル社会は、リスクのグローバル化と偏差を同時に生み出す。たとえば、遺伝子操作と核エネルギーに関しては「遠くなら大丈夫」とはならない。自分の家から遠いところで起こった事件は、あっという間に自分の近くにやって来る。足尾鉍毒事件に際して、声をあげる農民に恐れを抱いた息子を、「国益のためには一地方の犠牲などにとらわれるな」と一喝した陸奥宗光の「選択」はもはや「現実的」となり得ないところまで来ている。陸奥宗光の「現実主義」と田中正造の流域科学や宮沢賢治の科学の対比は、いま別の意味合いを持つようになってきているはずだ。

(サルデーニャの「選択」にむけて)

私たちが選ぶべきは、何パーセントの原発か、太陽光パネルか、風力か、石炭・石油のどれを選ぶかという問題ではまったくくない。そしてまた、イタリアの全国総合開発計画による「拠点開発」のなかでサルデーニャに「誘致」されたポルトヴェッスメ (Portovesume)、オッターナ (Ottana) やポルト・トーレス (Porto Torres) 等の大型プラント (石油化学コンビナート)、あるいはスルチス (Sulcis) などでの火力発電によって、サルデーニャで消費する電力をこえる電気を生産している (「サルデーニャで必要な電気の108%を生産し、イタリア本土に余剰分を「輸出」している」という問題でもない。「国策」として選択した場合は、かなりの程度の「ソフト・エネルギーパス」(cf. Lovins 1979 (c1977) = 1979) による生活も可能となっていくはずだ。つまり私たちが「引き受け」/応答する”べき“惑星社会の諸問題”は、権威者や専門家によって準備されたすでにあるメ

ニューからの「選択」の問題ではまったくない。むしろ、「選択」という枠組みの提示され方の背後にある社会構造の問題を深く考えるべきであるし、もっといえば現代の物質文明そのものの問題を、持続可能性、廃棄物の産出といった観点から考えてみるべきだ。

「エネルギーの選択」というかたちに投げ込まれている今日の私たちの状況を考えるとき、あらためてサルデーニャ内陸の村オルーネ (Orune) に生まれた哲学者・文化人類学者、A. ピリアル (Antonio Pigliaru, 1922-1969) の試みを想い出して欲しい。牧夫の生活をもたらす持続可能性の意味をよく識るピリアルは、誰もが息を合わせて「大規模拠点開発」へと向かおうとした1960年代に、「サルデーニャの選択」に向けて様々な立場からの議論を喚起するために、すべての人々に開かれた雑誌として『イクヌーサ (Ichnusa, 1956-65)』を創刊した。この雑誌は、サルデーニャにおけることなる立場の人々が議論し、新たな意味を発見する場所として機能し、その影響は今日にも及んでいる。

そしてまた、いまひとりのサルデーニャ出身の“智識人 (gens in cumscientia)”である A. グラムシ (Antonio Gramsci, 1891-1937) の以下の言葉を想起して欲しい。この言葉を、本日の報告と結びとしたいと思う。「学びなさい。わたしたちのあらゆる“智”を必要とする日が来るのだから。自らを揺り動かさなさい。わたしたちのあらゆる熱情を必要とする日が来るのだから。ひとつとつらなるのです。わたしたちのあらゆる力を必要とする日が来るのだから。」(L'Ordine Nuovo, anno I, n. 1, 1° maggio 1919)

以上の基調報告に続いて、中国人留学生 Yan Qiao は、資本主義化と市場開放へとむかう中国が抱える CO₂ と原発推進の問題についての解説が

なされた。サルデーニャ内陸部の町で福祉職に従事する G. ボエッドウ (Giusi Boeddu) からは、サルデーニャ州のエネルギー政策 (いかなるエネルギーをいかなる立場から選択するのか) についての報告がなされた。有機農法中心の NPO を経営する S. スラス (Sergio Sulas) は、持続可能な農業の観点からいかなるエネルギーが必要かという観点からの選択が必要だ、そしてまた農業に必要なエネルギーという問題と基地問題、牧畜の問題をひとつのまとまりとして考えるべきという話をした。Yan 報告は、あらかじめ準備した原稿を読み上げるかたちとなったが、他の2名は私の報告をふまえての回答のかたちをとっていた(「選択」の問題の根底を考える、環境・エネルギー問題を基地問題等も含めて考えるなど)。

3-3. 当日の「対話・談話」から“想起／創起”されたもの

会場からの質問・意見はとても活発で、多くの回答が見られた。筆者がイタリア・サルデーニャの現実の推移をよく理解したうえで、日本社会の状況を紹介・分析しているという受け止め方をしてもらっていたため、断片的で興味本位な質問が出ることはなかった。また、報告のなかで頻出する日本の地名や固有名詞についても、すでに何度も筆者による報告や講義を聴いていたり、各種の取り組みをともにした経験を持つひとびとが参加してくれていたため、最低限の説明で話の内容そのものへと入っていくことが出来た。「対話・談話」の土壌が整えられていたことが幸いし、Fukushima を通じて顕在化した日本の近代化の構造的な問題、エリート／公衆の回答の偏差が持つ意味を、サルデーニャの問題にひきつけて再解釈しつつの議論が実現した (たとえば、「これは、狭義の環境・エネルギー問題ではなく、より社会構造に内在的で、個々人の内面に埋め込まれた社会の問題とかわるのだ」といった意見が出された)。

毎週金曜日、国会議事堂前に集まるひとびとの話については、農学部で化学を専攻した若者から、「日本人は寡黙かつ従順であると思ひ込んでいましたので、『草の根』であるようなひとびとが、静かに、動きをつくっていることに驚嘆しています。イタリアやサルデーニャの反原発をめぐる動きは、日本のそれと対照的で、様々な大きな声だけが飛び交う一方で、現実を根底から揺り動かすような運動へとなっていません。寡黙で従順な『優等生』が、どうしてそこからはみ出すような行動をとるようになったのでしょうか。これは私たちの問題でもあるのですが、現在の社会の『現実的選択』の範囲内でしか行動できない大半のひとたちに対して、どんな働きかけをすることが出来るのでしょうか」と言った質問がなされた。

これに対しては、まさに「寡黙で従順な」という行動規範のイメージ自体が社会的に造られたものであり、その実践感覚の準拠軸となっている社会システムそのものに“裂け目”が生じていることを、かなり多くのひとたちが皮膚感覚でとらえていること、他方で自分は「社会的にエリート」だと思っているひとのほうが“選択の盲目（生身の現実から目をそらす *avere gli occhi bendati*）」に固執しつづけていることなどを話した。

運動から政治改革の可能性という観点から、内陸部の都市ヌオロで社会的経済に携わる人材育成に取り組むNPO団体（イタリアでの言い方は、ONLUS = *Organizzazione non lucrativa di utilità sociale*）である Lariso の元リーダーからは、「たしかに、『草の根』の動きには一定の社会的意味があると思うが、それは将来的にいかなる政治勢力となっていく可能性があるのか」という質問が出された。そしてまた、サッサリ大学の社会学系列のとりまとめ役となっている A. ファッダ教授（Antonio Fadda, 1946-）からは、「社会統制、システムの復元性といった観点から考えると、私は悲観的とならざるを得ない。『福島のおかげで』

イタリアの原発の再開を停止するという国民投票が成立したが、それは表面的かつ一過性の現象だ。イタリアの市場、経済、政治の状況は旧態依然のままだ。とりあえず『No』とは言ったものの、なにか解決策や代替案が提示されたわけではない。だとすると、散発的かつ偶発的な動きは結局のところ既存のシステムに取り込まれていき、イタリアも日本も、公共事業や拠点開発中心の政治体制という『もと来た道』にもどっていくのではないか」という見解が提示され、女子学生からもファッダの意見に呼応するかたちで、「私たちも、社会の動きに対して自分の無力さを感じている。目に見えない化学物質や放射能のことを考えると、本当に怖くなる。しかし、なかなか現実の社会は変えられないのではないか」といった意見が出された。20数年來の知友でもある両者の意見に対して、およそ以下のように筆者は応答した。

私は、既存の枠組みのなかで何が「達成」されるのかよりも、新たな社会にむけての意味を産出するという運動の観点から社会の動きを見ています。構造認識・現状把握といった点からは、楽観的な見通しが出てこないのは分かります。しかし、近代社会システムの“移行、移動、横断、航海、推移、変転、変化、移ろいの道行き・道程 (*passaggio*)”の現局面を考えると、“[時代の] 裂け目”はそう簡単に閉じてはいかないだろうという見通しを持っているのです。各国首脳や経済人は、既存のシステムの枠内での勝利をめざしているわけですが、いま直面しているのは、「このシステムには勝利者などいない (*In questo sistema il vincitore non c'è*)」という「状況」です。システム運動の古い処方箋は機能しないし、反システム運動もまた、「散発的・偶発的な運動」から着実に新たなシステムが構築されていくという見通しなど立たないでしょう。現在の社会の“深層／深

淵”における動きを実体化してとらえることは困難ですが、“未発の毛細管現象／胎動／社会運動”を感知するセンサーを持てば、予見し得ることはいくつかあります。

私がかもっとも着目しているのは、ごくふつうのひとたちのなかから、自分でも気付かずに、新たな社会に必要な“智 (cumscientia)”を産出しているひとたちがいることです。かつては、そういうひとたちとは誰かと言えば、特定の突出した知識人のことでした。“異端の予言者 (profeta estranea)”とでも言うべき存在で、社会から「飛躍」したり「超越」していることをその存在理由としていました。「予言者は故郷に入れられず (Nessuno è profeta in patria)」です。しかし、社会を統制するエリート／啓蒙と統制の対象としての「大衆 (uomo massa)」／既存の枠組みから突出した異端 (estraneo deviando)”という枠組みから、むしろ“ぶれてはみ出す”現実 (「草の根はどよめく」) に直面しているのではないかと思います¹⁶⁾。“智慧 (saggezza)”の萌芽が、避難者やデモに参加するひとたちのなかから、噴出しているはず (1968年の「プラハの春」で戦車に対抗した市民の動きがそうであったように)です。

ひとつだけ具体例をあげましょう。「3.11」から一年後、私が暮らす街に最首悟先生をお招きしました。生物学者として水俣病などにかかわり、「重度障害をかかえた娘 (星子さん) を通じて獲得した智恵です」(cf. 最首 1998) いうかたちで提示された話は、私のところに響きました。「娘を連れて急いでどこかに逃げ出すことは不可能です。どんな事態となっても“ここに居る”しかありません。だから、地球上のすべての原発をゼロにすべきである、放射性廃棄物の入った瓦礫をあらゆる自治体・住民は全面拒否すべきだ、

という“極論”を言いたいのです」と。生活者としての最首先生は、「世間知らず」で既存の枠から外れた「極道者 (estremista)」でしょう。しかし、「突出した知識人」としてでなく、障がい者を家族に持つ老人としての“偏ったトタリティ (totalità parziale)”から“智”を産出しているのだと思います。

いつどの時点でということとは言えないし、線形の段階論とはなっていませんが、こうした「無駄骨」のなかから、いまこの瞬間にも、日本でも、イタリアでも、危機の瞬間に“想起／創起”される“智慧 (saggezza)”生み出されているということだけは言いたいと思います。そしてこの微細な動きをとらえるのが、“生存の場としての地域社会のための学智 (Una cumscientia per le comunità che sopravvivono)”となり得るはず (はず) です。

会場には、やはり20数年来の友人であり言語・文化問題と環境問題を中心とする社会運動家としてよく知られているV.ミガレドゥ (Vincenzo Migaletto, 1952-) も招かれていた。放射線医学の専門家である彼は、米軍の原潜基地が建設されたラ・マッダレーナ諸島の事故と放射能汚染の問題に強い興味関心を持ち、社会運動の担い手としても活躍していたことから、筆者は1987年のサルデーニャ調査で知り合っている。彼はまた、「大規模拠点開発」によって建設されたが財政破綻で維持が困難となり、汚染物質と施設だけが残されたポルト・トッレスの石油化学コンビナートの工場廃棄物による汚染の問題にも強い関心を寄せてきた。

2003年にラ・マッダレーナ群島で「原子力潜水艦の大きな事故」¹⁷⁾ が起こり、事故の影響に対する調査が行われることになり、ミガレドゥは、政府の側でなくWWF (World Wide Fund for Nature, 世界自然保護基金。環境保護団体。国際的 NGO) から依頼され、フランスに本部があ

る放射能事故の影響を調べる専門医師グループ CRIIRAD (Commission de Recherche et d'Information Indépendantes sur la Radioactivité) とのネットワークで、「公的な調査」に対する反対調査の責任者となった。この運動のなかで、環境問題とかかわる医師の国際的ネットワークである ISDE (International Society Doctor for Environment, Medici per l'Ambiente) に参加し、ここで活動をするようになった。そして、放射線医学の専門知を活かしつつ、社会運動家としてエネルギー政策の制度面・政治経済面等についても情報を収集し、現在サルデーニャ州政府がすすめている、「緑の化学 (Chimica verde)」と名付けられたポルト・トッレスの「再生計画」が、「植林等の緑化計画」を唱えながらも結局は、旧態依然の巨大プラント建設という古い処方箋へとむかっていこうとすることを批判し、サルデーニャのすべての住民が、持続的開発・発展の問題を根本的に考えていくための情報と意見の提供をしてきた。その彼が、セミナーの途中で帰りがけたトニーノ (A. ファッダ教授の愛称) を呼び止め、以下のような議論を展開した。

トニーノは、「いま当面考えるべきことへの現実的対応」をしようとすることで、可視的な現実の背後で起こっている“毛細管現象”を見落としているのではないか。「財政・市場・政治勢力の構築」といった論点の立て方そのものが、2001年の「9.11」、2008年の「金融恐慌」、そして2011年の「3.11」などによって、配置変え (reconstellation/ricostellazione) を余儀なくされているのだ。

だとすると、既存の枠内からは『夢想だ』と言われるよう場所から未来を構想することのほうがはるかに現実的だ。日本の原発政策が抱える問題は、原発のないサルデーニャの問題とほとんど重なる。たとえば、現在、サルデーニャの政府が推し進めようとしている

環境政策 (Chimica verde) においても、日本の場合と同じく産官学の複合体の問題が存在している。たとえばカリアリ大学とサルデーニャ州政府は強い結びつきと相互依存によって政策をすすめようとしている。サルデーニャの支配層は、すべてを財政と投資をめぐる闘争に還元し、『エネルギー選択』を単なる『賭け金』としている。そこには、まったくといっていいほど、持続可能性という発想はなく、拙速に、その場しのぎの財政投融資計画のリズムで動いていく。そもそも、「エネルギー政策」の中身は、住民にほとんど知らされていない (その秘密主義は、Fukushima への日本政府の対応と酷似している)。まったくの『白紙』の状態からの『選択』などあるはずもなく、すでに利権がらみで建設されてしまったポルト・トッレスの巨大プラントや基地、マフィアがらみの風力発電、そしてまた新たな利権とつながる太陽光パネル等は、その都度の妥協や勢力争いの産物として、個々の位置づけを少しずつ変化させながら、大量のエネルギーの生産・需給・蕩尽を前提とする社会システムの一部を構成している。

持続可能性の問題と並んで、もっとも注意すべきは、廃棄物の問題だろう。放射性廃棄物のみならず、サルデーニャの巨大石油化学プラントは膨大な汚染物質と廃棄物を生産する基地となっているが、いまや外部の産業廃棄物を遺棄する場所となりかかっている。こうした廃棄をめぐる問題と持続可能性を結びつけて考えないといけない。そしてまずなによりも、個々の事実をひっくりめ、全体として何が起こりつつあるのかを多くのひとが知ることだ。

ミガレットゥが話す具体的事実 (たとえばシチリアのタラントから廃棄物が陸揚げされていると

いった事実)について、これだけ環境・原発・エネルギー問題に関心がある聴衆が集まってきているもほとんど知られていないということが、あらためて確認された。かつてA.ピリアルが提起したように、何十世代の先までも見渡した未来に責任／応答するかたちで、“不協の多声 (polifonia disfonica)”を発する場を創っていく必要があるのだという自覚が参加者の間に起こり、会は終了した。2011年5月のサルデーニャ州の住民投票、6月の国民投票の原発再開停止という結果の背後の住民の動きを知りたいと思っていたのだが、今回のセミナーに、話を聴きたいひとたちが自ら集まってきてくれた。「聞き取り」をせずとも自ら言葉を発してくれ、いわば「受動の能動」とでも言うべきかたちで“探究／探求型社会調査”を行うことが出来た¹⁸⁾。

2012年夏のサッサリにおける旧知の“地識人 (the streetwise)”たちとの“交感／交換／交感 (scambio, Verkehr)”のなかで、もっとも注目された論点は、くどよめきつつある「草の根」の“未発の毛細管現象／胎動／交感”は社会の制度変革へとつながる社会運動と成り得るのか」という点であった。本稿の結びとして、この点をふりかえることとしよう。

メルッチは、「選択のパラドクス」というトピックを立て、「私たちが誘惑すると同時に脅かすような可能性を前にして、私たちは意思決定に伴うすべてのリスクを引き受けざるを得ない（それが核によるカタストロフであれ、環境のカタストロフであれ、カタストロフとはこうしたリスクの極端なイメージでありメタファーである）」と言った (Melucci 1996a = 2008 : 61)。この現代社会を生きるものに固有の「可能性」と「選択のパラドクス」、そして“生存”の問題を重ね合わせて考えてみたい。

4. “惑星社会の諸問題”を引き受け／応答する“生存の場としての地域社会の学”へ——“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)”について

(生存の場としての地域社会)

「地域社会」という概念は、空間的広がりと社会的連帯の両方を含意するアンビヴァレンス (ambivalence) を持ってきた。しかし、いま地域社会は、惑星社会の生活・生存の「場」における問題として現象している。

近代的生産・生活様式は、現在、生態系にフィードバックされない「廃棄物 (garbage)」を生み出している。たとえば都市の生活を支えるエネルギーの生産に、原子力発電所が運転される。そのためには、ウランの採掘－精錬－燃料成形－発電－再処理－投棄というすべて過程での被爆が伴う。実際に被爆するのは、ウラン鉱山の労働者、精錬－燃料成形－発電過程における下請け労働者、発電所や「再処理」工場の近辺の住民、放射能廃棄物の貯蔵施設や投棄場の近辺の住民などである。従って、「廃棄」は、生産のための資源調達－加工－流通－利用－利用後の全過程の問題である。全過程とは、当然グローバルシステムと生態系を含めた全過程を意味している。そこでは、高いエントロピーを持つ「廃棄」物を他の場所に生み出すという代償を払って、「高度な秩序」を持つ生産物を作り上げているということになる。従って「廃棄」とは、近代的生産－生活様式とそれを維持・強化するような「開発・発展」によって生み出される生産物である。

近代化のなかで西欧社会そのもののシステム化、非西欧社会を含めた世界システム化、〈生産－流通－消費－廃棄〉という人間の対象化活動の全過程の拡大にともなう生態系の地球システム化が進行した。これらが進む過程で、人間は、身体のレヴェルという最も根源的なレヴェルにおい

て、社会システムとの相互浸透、世界システムとの相互浸透、生態系との相互浸透を常態とするようになった。すなわち、被拘束-拘束、複雑化-脱複雑化の関係にあるグローバルシステムと生態系は、いわば拡大された身体であるという事態が立ち現われて来るようになった。惑星社会が、部分社会自体のシステム化、世界システム化、地球システム化の全てのレベルを含む概念であることを考えるなら、〈拡大された身体としての惑星社会〉という言い方をすることも可能となろう。

他方で、人間にとっての生存は、生命の維持に加えて「社会的生存」も含意している。人類は個人として“生存”しえない場合、共同体として、教団として、法的人格として、階級として、民族として“生存”の場を確保してきた。自然との関係においては、自然はまず、人類の生存しうる範囲を制約する力を持っていた。人間が“生存”しうる範囲は、自然によって制約されていたと言ってもよい。次の段階として、自然によって制約されていた複数の人間集団の間の問題がここに存立する。強い集団が、自分達の“生存”の範囲を越境して「線引き (bounding)」をする。拡張の方向は、一つは自然に対して、もう一つはより弱い人間集団に対してである。人間集団に対する「線引き」は、人種・宗教・性・年齢・形質の違い・居住地域、等々を境としてなされる“生存”の場を自ら決定する主体（個人・集団・組織・システムなど）の重層構造として現象する。決定権を有する主体によって「線引き」の範囲は移動し、移動によって支配の構造は保たれてきた。

そしていま、「社会が自らを破壊できる力を備え、何ら保証もない選択に個人の生活が依存しているような時代において、どこに私たちの境界線を置くのか、これが人間生活の向き合うべき課題となっている。私たちの境界線をどこに置くかは、意識的なことがらとなり」、それゆえ、「私たちがもつ限界を受け容れる自由ともなった」のである (Melucci 1996a = 2008 : 78-79)。いま私た

ちにとっての、「線引き」の問題は、「される側」としてのみならず、限界を識ることと同時に自らに由るものとして再定義されている。

他方で本稿の冒頭で述べたように、今日の“惑星社会の諸問題”は、“生存の場としての地域社会 (le comunità che sopravvivono)”の問題として立ち現れている¹⁹⁾。地域社会以前の惑星地球における“生存”の問題を前提として、応答の方向を見定めていかねばならないのである。

(“未発の毛細管現象／胎動／相互承認／社会運動 (movimenti nascenti)”)

惑星社会のもとでの“生存の場としての地域社会”の問題とは、第一に、従来の制度・理論枠組では解けないような矛盾・対立の客観的な現象形態であり、第二に、それを解くことなしには私たちの“生存”が脅かされるような、いわば“生体的関係的”な、そしてまさにそれ故に、わが身にとって「焦眉の問題 (urgent problem)」である。ただしそれは、常に意識されている訳ではない。つまり、問題を意識する者は様々な地域・集団に偏在している。そして第三に、問題の〈当事者〉が、何かをきっかけとして問題を意識するに至った時に、「運動 (movimenti)」が起こり、その最終的帰結としてオルタナティブの提示にまで至らざるをえないような問題を意味している (新原 2003b)。

〈どよめきつつある「草の根」の“未発の毛細管現象／胎動／交感”は社会の制度変革へとつながる社会運動と成り得るのか〉という問いに対して、メルッチ、メルレルとともに提起しようとしたのは、個々人の内なる微細が動きから、何らかの運動が多重／多層／多面的に生まれていく“複合・重合”的な道行き (passaggio) ——「未発の状態 (stato nascente)」(Alberoni 1968 : 1989) とは、ある特定の「事態／事件」が未だ明示的には起こっていない状態であるが、しかし、この状態から、あらたな枠組が生起しつつある状態、

「創発 (emergence)」(Cf. Polanyi 1966 = 2003 : 2007) が生まれる——を把握するための概念装置であり、そのための社会調査の方法を生み出すことであった²⁰⁾。

この試みは、「いまだ構築の途上にある」ものであるが、本稿の結びとして、“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)”という「動き／運動 (movimenti)」を理解するための概念装置についてのまとめをおこなっておきたい。

①“毛細管現象 (fenomeno della capillarità)”

個々人の心意／深意／真意のレベル，“深層 (obscurity, oscurità)”“深淵 (abyss, abisso)”で起こりつつある“毛細管現象 (fenomeno della capillarità)”は、“惑星社会”においては、グラムシが把握しようとしたところの、社会の“深層／深淵”における“毛細管現象”と強く連動している。この、社会にとっての「指先」である、特定の個人の“深層／深淵”で始まる“毛細管現象”は、“個・体 (individuo corporale)”と“生・体 (corpus corporale)”の層を包含する“生体 (organismo vivente)”において、“生体的関係のカタストロフ (la catastrofe biologica e relazionale della specie umana)”を感知することで、「せっぱつまって」起こる。

②“胎動 (movimenti dell'oscurità antropologica)”

これまで構造やシステムに組み込まれることで確保していた生活が、その生活の「安定」や「豊かさ」の代償に“生存”そのものが危機に瀕するという状況 (リスク) を察知・体感し、身体に刻み込まれた社会の構造から“ぶれてはみ出す (deviando, abweichend)”ことへの不安をこえて、一步を踏み出してしまふ。これは、個々人のなかで、集団のなかで、地域のなかで、ひとつの微細な「徴候 (seni)」でしかないが、同時多発的に、非規則的に、“雑唱”のかたちで起こることによ

て、地域小社会において／地域をこえて、“胎動 (movimenti dell'oscurità antropologica)”として現象していく。

③“無償性の交感 (accettazione di gratuità)”

個々人の“深層／深淵”で、生存の単位としての地域小社会の内部の“毛細管現象 (fenomeno della capillarità)”として現象する“胎動 (movimenti dell'oscurità antropologica)”は、資源動員のかたちとは相対的な距離を持ちつつ、“無償性の交感 (accettazione di gratuità)”として現象する (たとえば、「いのちをつなぐ」のだという意識で行動する)。これは「承認をめぐる闘争 (lotta per riconoscimento)」としての「相互承認 (Anerkennung)」でなく、ただ受け止める (accettare) という性質を持つ。「共通感覚」「記憶の共同」「共振」などの要素とともに、“無償性の交感 (accettazione di gratuità)”は、世代や国家システム等をこえて存在する「まともさ (fairness)」の知覚とかかわっている。「骨惜しみなく、無条件に」という要素が組み込まれるかたちで資源動員や条件闘争へと結びつく。

④“個々人の内なる社会変動 (metamorfosi nell'interno degli individui corporeali)”

このような内面も含めた、“深層／深淵”をくぐり抜けた現象を介して、二者から三者へのつながりが突然創られ、社会運動を生み出す社会的な動きが立ち現れる。ごくふつうのひとつとによって危機の瞬間に“想起／創起”されたもののなかから、“創起する動き (movimenti emergenti)”となるものがある。“創起する動き (movimenti emergenti)”とは、危機の瞬間に“居合わせ”，その特定の時と場でのみ想起される“智恵 (sapere)”を突き合わせていく動きのなかで創起される「創発 (emergence)」であり，movimenti nascenti のなかに movimenti emergenti が散発的に立ち現れる。

つまりは、ひとつのうねりのなかに、一者と二者と三者（個々の身体と個々人の関係、地域、社会）の相互作用とそれぞれの基層における微細な動きが存在している。この一連の動きが持つ諸側面、衝突・混交・混成・重合を総体としてとらえる言葉が、“個々人の内なる社会変動 (metamorfosi nell' interno degli individui corpolali)” となる。さらにこの動きそのものの社会的意味をとらえた概念が、“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)” となる。

ごくふつうのひとびとが、せっぱつまって、ぎりぎりのところから、焦眉の問題に対して応答していく呼吸とリズムにあわせて、人間と社会を調査研究することを使命とする者（リサーチャー）は、継起する眼前の問題に対して、ひきつづき“社会学的探求”を続けることになる。“探究／探求型社会調査”により、知見を蓄積し、“生身の現実”の問題に呼応するかたちで社会調査の「エピステモロジー／メソドロジー」と概念装置の形を変えて (change form) いくのだ。

現在ある形を変えるという意味での喪失に応答することを選び取りつづけたメルッチのように。

形を変える (changing form) には、変化の流動性、保持しながら喪失を受容する能力、リスクへの寛容、限界を見極める分別が必要である。西洋の近代的体験を条件づけてきた冷淡で計算高い合理性は、こうした要請に向いていない。新しい質が必要であり、私たちはまさにいまそれを学び始めている。破裂することなくひとつの形から別の形へと移り変わっていく、予報できない断片をひとつに束ねていく、そのためには、直観力と想像力を必要とする。……喪失も展望もないメタモルフォーゼなど存在しない。人が形を変えていけるのは、自己の喪失を進んで受け入れ、好奇心を持って想像をめぐらし、驚きを

もってしかし恐れることなく、可能性と出会える不定形な領域に入り込んでいこうとする、そんなときだけだ。(Melucci 1996a = 2008 : 79)。

- 1) 古城利明は、メルレル、メルッチと筆者が練成してきた“変化の道行き”と“個々人の内なる社会変動”に関する理論（「島嶼社会論」と“根 (radice)”の理論など）について、日本の地域社会の「再生」を考えるという文脈で言及している（古城利明 2011a : 12-13 ; 2011b）。
- 2) ここでとりあげた発言は、2012年8月2日にサッサリ大学地域研究所主催の国際セミナー「エネルギー選択、市民社会、生活の質」における会場とのやりとりから生まれた言葉による。「3.11」直後、イタリアの新聞のほとんどは、世界終局を描いたヨハネ黙示録を意味する言葉を用いて「日本の破局 (L'Apocalisse del Giappone)」という表現をした。イタリア・ヨーロッパにおける「3.11」への関心の推移については、イタリアを中心としたドキュメントの収集蓄積と、サルデーニャを中心とした識者からの意見聴取と意見交換に基づいている。
- 3) メルッチが、“生体的関係のカタストロフ”という言葉でとらえようとしたのは、実証科学の対象とするには困難さをともなう“心身／身心現象 (fenomeno dell'oscurità antropologica)”の層である。“心身／身心現象”は、人間そのものの (antropo-) 「身体と精神、感覚、知覚、意識、胸中、心、魂 (corpo e mente, sensazione, senso, percezione, coscienza, consapevolezza, cuore, animo, anima)」などとしてイメージされる〈領域 (“生体 (organismo vivente)”)〉の奥深くで起こっている現象である。「身体」は、そのものとしては (an sich)、そのなかに“埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろした (radicato)”社会や文化や自然の総体である。“心身／身心”は、その総体を捉えようとした場合に (für sich) 表象されているものである。“多重／多層／多面”的に「差異を産出する複合社会」においては、「社会関係のあり方をどう変えるのか」という問題が個々人の奥深くの問題として現象している」と考えた A.メルッチは、

社会システム論や A. トュレーヌの「新しい社会運動論」から多くを吸収しつつも、個々人の身体レベルの問題にまで「おりにいかねばならなかった」。システムと身体との心身／身心現象」についての考察については、とりわけ (Melucci, 1984b ; 1991 ; 1994a ; 1996a = 2008 ; 2000g) (新原 1995a ; 1996 ; 1998b ; 1998e ; 2001d ; 2003b ; 2004a ; 2004c ; 2008b ; 2009a ; 2010) でなされている。

〈地域社会の“深層／深淵”についての「理解」を“探究／探求”し、その内容を“叙述／伝達”する〉というのは、対象を限定したうえでの「明晰さ (Klarheit)」をめざすというよりも、現実を大きくつかむ (begreifen) ことができる「難解さ (Dunkelheit)」をめざす試みであるかもしれない。ここでの「難解さ」とは、「暗く、どんよりとした、暗所、不明瞭な (oscuro, obscurus)」、すなわち“深層 (obscurity, oscurità)”にふれようとすることを意味する。“深層”はまた、遠目に「鳥の目」から眺望するのではなく、「虫の目」でその「穴」あるいは「淵」に臨むものの眼からすれば、「底のないもの (abyssus, byssos)」という意味で“深淵 (abyss, abisso)”でもある。

“深層／深淵”をテーマとした調査研究と考察の成果は、主としてサルデーニャでの知見に依拠する (新原 2004a ; 2004b ; 2007a ; 2009b) (Niihara 1999)。沖縄については (新原 1988 ; 1992c ; 1997b ; 1998a ; 1998e ; 2000a ; 2001a ; 2001b ; 2003a)、オランダについては (2006a) を参照されたい。

- 4) “瓦礫や廃墟の切れっ端 (rovinaccio)” “破局へと至る瓦礫 (andare in rovina)” “未発の瓦礫 (macerie/rovine nascenti)” については、(新原 2007a) で詳しく論じている。とりわけこの視点からのメルッチの社会理論が、阪神・淡路大震災に直面して以降の日本の都市・地域社会 (研究) にとってきわめて深い示唆をもたらすことについては、ミラノの追悼シンポジウムにおいて報告した (Niihara 2008)。その後 (新原 2009a) においても言及している。
- 5) 「持続可能な開発」という言葉がある。「市場のレッセ・フェール (自由放任)」ではなく、国民国家や国民社会を「超」えた地球規模の新たな主体

がグローバル市場を統御することで実現するという枠組を持っている (「グローバルな介入的自由主義」)。「サステナブル・シティ (環境都市)」は、この「改革」の核を担う存在となり、「グローバル市場の中核」である「世界都市」は、「サステナブル・シティ」へと脱皮できるかどうか問われることになる。他方で別の角度から提起された「内発的發展」は、その問題提起の根源性にもかかわらず、十分には理解されず、「地域開発」や「開発援助」の一手法として、「グローバルな都市的發展から取り残された地方」における「まちづくり」や「一村一品運動」という「官製の地域振興」のスローガンへと変化させられていった。ここで再評価したいのは、K. ポランニー (Karl Polanyi, 1886-1964)、シューマッハー (Ernst Friedrich Schumacher, 1911-1977)、S. クマール (Satish Kumar, 1936-), 玉野井芳郎 (1918-1985) や鶴見和子 (1918-2006) たちの「地域主義——地域小社会が持つ潜在力の意味を問い直し、この原初的な小単位から近代社会そのものを問い直すという試みである。

- 6) この問題に答えるには、移動の観点から、endogeno (内にして外／外にして内であるような対位的な) あり方をもった“境界領域を生きるひと (gens in cunfinem)”と“社会文化的な島々 (isole socio-culturali)”に関するメルレルの理論を参照されたい (Merler 2004 ; 2006) (Merler-Niihara 2011a ; 2011b)。
- 7) とりわけ阪神・淡路大震災以降の日本の都市・地域社会研究と、「限界を受け容れる自由 (free acceptance of our limits)」と「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由 (a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」については、(新原 2009a) を参照されたい。
- 8) 1987年のインテンシヴな識者調査の結果については、新原道信「イタリア・サルデーニャ州における地域開発と知識人の意識——地域の内発的發展に関する意見聴取り」地域社会学会第13回大会、1988年4月23日で口頭報告をしている。継続的で双方向的な対話・比較の方法については、下記の鶴見和子の理解による南方熊楠の比較学を共有することに留意してきた。「まずデータの観察と

蒐集から初めて、さまざまなデータを分類し、各々のカテゴリーの属性の共通点と相違点をしらべる。そしてことなる属性をもつことになるカテゴリーの事物の間の関係をしらべ、抽象度の低い『実体的』理論から、しだいに抽象度の高い『形式的理論』へと、累積的に調査研究をすすめる。ここでは仮説の検討が目的ではなく、ことなるカテゴリーとその属性のあいだの新しい関係を発見していくことが目的である。したがって、事物の関係の発見のために用いられる仮説または仮説の体系は、単一ではなく、発見に役立つかぎりにおいて、複雑であり、多様であってよい。……比較をするためには、まず異なるカテゴリーに対象を分類し、「分類された個体または集団を、きり離して、別々のものとしてその固定され区分けされた属性を比較するだけでは不十分なのである。」「異なる種類に分類されたものどうしのあいだに、相互作用があることに注目し、その相互作用をとおして、それぞれ固有と思われた属性が変化すること」を念頭におく（鶴見 1981：178-183）。

- 9) メルレルたちの研究グループ FOIST が実践してきた調査研究方法の特徴を表すとすれば、K. レヴィン（Kurt Lewin, 1890-1947）、O. ボルダ（Orlando Fals Borda, 1925-2008）、P. フレイレ（Paulo Reglus Neves Freire, 1921-1997）などの流れを汲む“コミュニティを基盤とする参加型アクション・リサーチ（Community-Based Participatory Action Research (CBPR)）”となる。筆者は、1987年よりメルレルたち FOIST の調査研究実践に共同研究者として関与し、調査研究方法を共同開発してきた。その成果は、2008年のカナダ・ヴィクトリア大学においても報告されている（Merler-Vargiu, 2008）（<http://eprints.uniss.it/4109/>）。

W.F. ホワイトが『ストリート・コーナー・ソサエティ』の「参与観察調査」の経験を発展させ提唱した「参与的行為調査（Participatory Action Research）」——「参与的行為調査は、調査者が研究対象の組織のメンバーを招き、データの収集と分析を通しての調査計画や、調査での発見を実際に適用していくという調査プロセスのすべての段階において、共に参加し研究するというひとつの方法」（Whyte 1993 = 2000：358）とも類似可能な調査方法である。筆者は、サッサリ大学との共

同調査研究をイタリア・ヨーロッパ・大西洋島嶼社会（アブレス、カーボベルデなど）で行う一方、国内において、S 団地、E キャンプなどをフィールドとして調査実践を行ってきており（新原 2012a）、現在は、立川市において新たなプロジェクトに着手している。土壌の地均しをする初期段階においては、構造的認識とデータの蓄積と、フィールドでの諸活動に準備段階から持続的に参加するなかで、フィールドノーツを蓄積する。中期段階（土壌を豊かにする時期）においては、「政策」（地域社会計画）の構築と、大学と地域の双方での社会の“社会のオペレーター（operatori sociali）”育成に着手する。さらに、「政策」の軌道修正をしつつ、コミュニティ形成の体験を移植することを企図する調査研究である。メルレルの共同研究者であるサッサリ大学の A. ヴァルジウ（Andrea Vargiu）を中心に地中海・ヨーロッパの諸大学の連携プロジェクトとしてすすめられている調査方法 CBPR のワークショップ／サマースクールと連携を図っている。

- 10) メルッチは、『リフレクシヴ・ソシオロジーにむけて：質的調査と文化（*Verso una sociologia riflessiva: Ricerca qualitativa e culturale*）』（Melucci, 1996c）において、社会運動研究を中心とした質的調査研究の方法をとりまとめた。その後、“聴くことの社会学（sociologia dell'ascolto）”、“社会学的探求（Sociological Explorations/Esplorazioni sociologiche）”の錬成を最晩年の課題としたが、その途上でこの世を去った。“療法的でリフレクシヴな調査研究（ricerca terapeutica e riflessiva, Therapeutic and Reflexive Research）”は、メルッチ最晩年の企図をアンナ夫人との間で再構成した調査実践の方法である。メルッチの死後、アンナ夫人、メルッチの臨床社会学的研究における共同研究者、筆者との間では、“療法的な聴きとり調査の成果としての“痛む／傷む／悼むひと（homines patientes）”とかかわるエスノグラフィー／モノグラフの蓄積（I quaderni di “homines patientes”）、絵画・詩・舞蹈などの創造活動の蓄積、メルッチがのこしたテープにより療法的でリフレクシヴな能力を身につけた“社会のオペレーター（operatori sociali）”の育成などを含めた“聴くことの間”の工房（Centro studi- I luoghi dell' di ascolto）”を企

図している。アンナ夫人とメルッチの臨床社会学の共同研究者だったフェラーラ大学の M. イングロッソ (Marco Ingrosso) たちが、実施している療法的調査のワークショップとの連携を図りつつ、立川でのプロジェクト等で実践していく。

- 11) “社会学的探求 (Sociological Explorations/Esplorazioni sociologiche)” の見取り図については、(新原 2009c ; 2010 ; 2011b ; 2011d ; 2012b) 等で考察のとりまとめを行っている。
- 12) 「探究する」は、research, investigation, inquiry, study, ricerca, studio, indagine, investigazione であり、「仮借なき [博識の] 探究 (a relentless erudition) (erudizione = ampio corredo di cognizioni intorno a varie discipline (erudire = rudis [rozzo] + ex-) の含意を持つ。すなわち、「探究」には、穿鑿の鋭さ、博識への粘り強さがあり、ゆっくり lente となる (ゆったり落ち着いて placarsi, やわらかに intenerirsi, 上品に静まる addolcirsi) ことがない。これに対して、「探求する」は、quest, search, pursuit, andare in cerca di qu.co, esplorare であり、「探検する」「踏査する」「渉猟する」(esplorare (explorare [ex- 外に + plorare 流す よく流れるようにする])) の含意がある。
- 13) サッサリ大学, ミラノ大学, ミラノ・ピッコカ大学, トレント大学, トリエステ大学, ローマ大学, ナポリ大学 (以上, イタリア), エステルズンド大学, ストックホルム大学 (スウェーデン), サンパウロ大学, フルミネンセ大学, リオデジャネイロ大学, ヴイトーリア大学 (ブラジル), 新リスボン大学, アゾレス大学 (ポルトガル), ヘルシンキ大学 (フィンランド), カーボベルデ大学 (カーボベルデ), コベル大学 (スロヴェニア) 等のイタリア・ヨーロッパ・アフリカ・南米の各大学等での活動を通じて、「対話」「談話」の機会を創出してきた。そうすることで、観察・聴取調査の“基点/起点”となるいくつかの場所においては、すでに知己となり信頼を勝ち得たひとたちを通じて、深化した「対話・談話」の土壌が準備されているかたちで話を始めることが出来る。そのため、短期の滞在で、不在期間の生じた変化の流れをかなりの程度で類推・検証することが可能となる。
- 14) ここでの記述は、中央大学の在外研究員として 2010年4月から2011年3月まで滞在了したサッサリ

での“探究／探求型社会調査”に基づいている。

- 15) この言葉は、哲学者・古在由重 (1901-1990) の著書『草の根はどよめく』(古在 1982) を典拠としている。古在は同書のなかで、「グラスルーツ (草の根)」の意義と「現実路線」の背後の「基本的な矛盾」を論じている。
- 16) ある種の「飛躍」や「超越」, 「亡命」や「離脱」をした思想家や哲学者ではなく、ごくふつうの人間が日々特定の「状況」のなかで現実に対応し、その対応の連鎖のなかで自らの組成に変化を生じさせていくプロセスを、一般論で語るのではなく、小さな「徴候」をあつめ、微細に観て、聴いて、察して、それを理解するための“かまえとしての理論”をつくるという苦勞を徹底しておこなうというメルレルとメルッチの“社会学的探求 (Sociological Explorations/Esplorazioni sociologiche)”の“かまえ (disposizione)”については、(新原 2007a : 43-44) を参照されたい。
- 17) Arcipelago della Maddalena は、サルデーニャ島の北東沖にある群島であり、経済的には、軍事上の要衝として成り立ってきた。1972年アンドレオッティ内閣の時代にサント・ステファノ島に米軍直轄の原潜基地が建設され、1980年代には、シチリアのコミゾ島と並んで、ヨーロッパの反核平和運動にとって象徴的意味を持ち続けた。2003年10月25日、そのラ・マッダレーナ群島付近で、アメリカ海軍のロサンゼルス級原子力潜水艦のハートフォードが座礁し、放射能汚染が問題となった。
- 18) 日本語であれイタリア語であれ、言いたいこと伝えたいことのすべてが達成されるわけではない。最善の準備が出来るわけでもない。その場所に生じたことからのすべてをデータに出来るわけでもない。しかし、突然の「無茶な依頼」に応じての「ただ働き」や「無駄骨」をくりかえすことで、「歩留まり」が少しずつ出来ていく。最善ではなくても次善のパフォーマンスを安定して発揮出来るようになる。「ただ働き」や「無駄骨」は、いかなる「状況」のもとでも、自分の「条件」を整え確実に結果を出し続ける力 (“臨場・臨床の智の思行”) を養うための自己への投資となっている。
数日後、メルレルも含めた他の何名かとミガレドゥの家族が集まり、夕食をともにしながらセミナーをふりかえった。シンポジウムやセミ

ナーなどでの議論は、これまでの経験の蓄積で、ほぼ理解と予測が可能となっているが、食事をしながらの会話は、常に理解と予測の範囲をこえるところがある。この日の議論も、イタリア語のみならず、サルデーニャ語、カタルーニャ語、ラテン語、スペイン語、フランス語などのネオ・ラテンの言葉と、いくつかの英語の専門用語が飛び交っていたのだが、言語的に多声であることのみならず、メルレルはもちろんのこと、この日のメンバーは、サルデーニャを代表する知識人・文化人であり、彼らの話の背後にある経験を含めて理解しつつ、会話の変化とスピードについていくのは、困難を極めた。

ミガレドゥは筆者とはじめて出会ったときのことをよく覚えていた。ちょうどいま、20代前半の若者となった一人息子が生まれたばかりの1988年の大晦日のことだ。この日も、サルデーニャの政治と文化についての激論で夜を過ごし、彼は、自分が書いたサルデーニャ語の詩に曲をつけて、ギター演奏をしながら歌った。そのときの会話の端々から感じられた印象は、彼がただならぬ洞察力をもった、自分の土地をよく知り、愛し、憂える知識人だというものだった。彼が医師でもあるということを知っていたが、放射線専門医であるということよりも、サルデーニャの言語・文化への強い関心と、地域の自立を希求するサルデーニャ主義者であることが理解できた。

1988年秋から1989年冬にかけての知識人・文化人、運動家との交流によって、個々人が当面の関心を寄せ、「論点」や「争点」となっていることからの背後に、原思想や原問題とでも言うべきものがあることを“自ら学ぶ／骨身にしみる／身体でわかる (autoistruirsi)” 機会を得た。こうしたひとたちと長く付き合っていくことで、場に変化が生じていったとしても、“生身の現実” に対する応答の仕方には一定の法則性があるのだということを学んだ。これは、(体制に対する反体制の運動内部に、ちょうど「合わせ鏡」のようなピラミッドが形成され、そのなかの一分野における自分のテリトリー、立ち位置からのみ、意見と行動が出てくる)「組織人」のそれとはことなる動き方となっているのだ。

19) 「3.11以降」、聞き書きを中心とする歴史学者・

大門正克が企画した「シリーズ・「生存」の歴史を掘り起こす——東北から問う近代120年」など、歴史学者の間で「生存」に軸足を置いて東北の近現代史を掘り起こす試みがすすめられている。

20) 現代地域社会の“移行、変転、変化 (passaggio)” のなかで、地域社会に生きるひとびとの“深層／深淵” 部分においていかなる“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)” が起こっているのかについては、メルレルとの協業で析出した概念装置である“根の流動性／重合性 (fluidità/compositezza delle radici umane)” に即して(新原 2011b)で論じている。

引用・参考文献

- Alberoni, Francesco, 1968, *Statu Nascenti*, Bologna: Il Mulino.
- , 1989, *Genesis*, Milano: Garzanti.
- 古城利明, 2011a 「総論・地域社会学の構成と展開 [新版]」地域社会学会編『キーワード地域社会学 新版』ハーベスト社。
- , 2011b 『「帝国」と自治——リージョンの政治とローカルの政治』中央大学出版部。
- 日高六郎, 1986 「市民と市民運動」似田貝香門他編『リーディングス日本の社会学 10 社会運動』東京大学出版会。
- 石牟礼道子, 1972 『苦海浄土——わが水俣病』講談社。
- 古在由重, 1982 『草の根はどよめく』築地書館。
- Lovins, Amory B., 1979 (c1977), *Soft energy paths: toward a durable peace*, New York: Harper Colophon Books. (= 1979, 室田泰弘・槌屋治紀訳『ソフト・エネルギー・パス: 永続的平和への道』)
- Melucci, Alberto, 1982, *L'invenzione del presente. Movimenti, identità, bisogni individuali*, Bologna: Il Mulino.
- , 1984a, *Altri codici. Aree di movimento nella metropoli*, Bologna: Il Mulino.
- , 1984b, *Corpi estranei: Tempo interno e tempo sociale in psicoterapia*, Milano: Ghedini.
- , 1989, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Philadelphia: Temple University Press. (= 1997,

- 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民：新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店。）
- , 1991, *Il gioco dell'io: Il cambiamento di sé in una società globale*, Milano: Feltrinelli.
- , 1994a, *Passaggio d'epoca: Il futuro è adesso*, Milano: Feltrinelli.
- , 1994b, *Creatività: miti, discorsi, processi*, Milano: Feltrinelli.
- , 1996a, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press. (= 2008, 新原道信他訳『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』ハーベスト社.)
- , 1996b, *Challenging Codes. Collective Action in the Information Age*, New York: Cambridge University Press.
- , 1996c, *Verso una sociologia riflessiva: Ricerca qualitativa e cultura*, Bologna: Il Mulino.
- , 2000a, *Zénta: Poesie in dialetto romagnolo*, Rimini: Pazzini.
- , 2000b, *Giorni e cose*, Rimini: Pazzini.
- , 2000c, *Parole chiave: Per un nuovo lessico delle scienze sociali*, Roma: Carocci.
- , 2000d, *Diventare persone: Conflitti e nuova cittadinanza nella società planetaria*, Torino: Edizioni Gruppo Abele.
- , 2000e, *Culture in gioco: Differenze per convivere*, Milano: Il saggiatore.
- , 2000f, “Sociology of Listening, Listening to Sociology”. (= 2001, 新原道信訳「聴くこと社会学」地域社会学会編『市民と地域——自己決定・協働, その主体 地域社会学会年報13』ハーベスト社.)
- , 2000g, “Homines patientes. Sociological Explorations (Homines patientes. Esplorazione sociologica)”, presso l'Università Hitotsubashi di Tokyo.
- , 2002, *Mongolfiere*, Milano: Archinto.
- Melucci, Alberto e Anna Fabbrini, 1991, *I luoghi dell'ascolto: Adolescenti e servizi di consultazione*, Milano: Guerini.
- , 1992, *L'età dell'oro: Adolescenti tra sogno ed esperienza*, Milano: Guerini.
- , 1993, *Prontogiovani: Centralino di aiuto per adolescenti: Cronaca di un'esperienza*, Milano: Guerini.
- Merler, Alberto, 2004, *Realtà composite e isole socio-culturali: Il ruolo delle minoranze linguistiche*. (= 2004, 新原道信訳「“マイノリティ”のヨーロッパ——“社会文化的な島々”は, “混交, 混成し, 重合”する」永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社)
- , 2006, *Mobilitate humana e formação do novo povo / L'azione comunitaria dell'io composito nelle realtà europee: Possibili conclusioni eterodosse*. (= 2006, 新原道信訳「世界の移動と定住の諸過程——移動の複合性・重合性から見たヨーロッパの社会的空間の再構成」新原道信他編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂)
- Merler Alberto e M. Niihara, 2011a, *Terre e mari di confine. Una guida per viaggiare e comparare la Sardegna e il Giappone con altre isole*, in “Quaderni Bolotanesi”, n.37.
- , 2011b, *Le migrazioni giapponesi ripetute in America Latina*, in “Visioni Latino Americane”, Rivista semestrale del Centro Studi per l'America Latina, Anno III, Numero 5.
- 新原道信, 1988, 「対抗文化の可能性——沖縄・広島・長崎における生活の見直しと自立への動き」『平和運動の思想と組織に関する政治社会学的研究』(昭和60-62年度科学研究費補助金(総合A)研究成果報告書, 研究代表者・吉原功)。
- , 1990 「小さな主体の潜在力——イタリア・サルデーニャ島の「開発・発展」をめぐる」季刊『窓』第3号。
- , 1991a 「地域の内発的発展の先行条件に関する一考察——サルデーニャにおける『地域問題』把握の過程と知識人」千葉大学文学部『人文研究』第20号。
- , 1991b 「統合ヨーロッパの内なる『島』と『群島』——イタリア・サルデーニャの移民が選択した協同への回路」『思想と現代』第25号。
- , 1992a 「島嶼社会論の試み——「複合」社会の把握に関する社会学的考察」千葉大学文学部『人

- 文研究』第21号。
- , 1992b 「ひとつのヨーロッパ・もうひとつのヨーロッパ—イタリアにおける“複合社会”論の展開が意味するもの」 関東社会学会『年報社会学論集』第5号。
- , 1992c 「沖縄の自立と内発的發展を考える——地中海島嶼社会との比較で」 日本平和学会『平和研究』第17号。
- , 1992d 「イタリア社会の再発見——“混成社会”に関する社会学的考察」 千葉大学文学部『人文研究』第22号。
- , 1993 「方法としての地中海への“旅 (itinerario)”——日本社会と日本人を再発見するために」 奥山真知・田卷松雄編『20世紀末の諸相——資本・国家・民族と「国際化」』八千代出版。
- , 1995a 「“移動民”の都市社会学——“方法としての旅”をつらねて」 奥田道大編『21世紀の都市社会学 第2巻 コミュニティとエスニシティ』勁草書房。
- , 1995b 「『素人』の学としての沖縄関係学」『沖縄関係学研究会 論集 創刊号』。
- , 1996 『横浜の内なる社会的・文化的“島”に関する実証社会学的研究』 かながわ学術研究交流財団。
- , 1997a 『ホモ・モーベンス——旅する社会学』 窓社。
- , 1997b 「“移動民 (homo movens)” の出会う方」『現代思想』 vol.251。
- , 1998a 「Over Sea Okinawans……それは境界をこえるものの謂である」 川崎市文化財団『EGO-SITE 沖縄現代美術1998』。
- , 1998b 「THE BODY SILENT——身体の内から社会を見る」『現代思想』 vol.26-2。
- , 1998c 「境界領域の思想——「辺境」のイタリア知識人論ノート」『現代思想』 vol.26-3。
- , 1998d 「そこに一本の木があって——サルデーニャのことがらが語る地域社会論のために」 専修大学現代文化研究会『現文研』 No.74。
- , 1998e 「島への道——語り得ぬすべてのものを語るという試み」『ユリイカ』 No.407, vol.30-10。
- , 1999 「“異文化”を“社会学する”」 玉水俊哲・矢澤修次郎編『社会学のよろこび』 八千代出版。
- , 2000a 「“恐怖の岬”をこえて——サイパン、テナアン、ロタへの旅」『EDGE』 No.9-10合併号。
- , 2000b 「『ストリート・コーナー・ソサエティ』を読む」『書斎の窓』 No.496。
- , 2001a 「生じたことがらを語るという営みのエピステモロジー」 大阪大学『日本学報』 No.20。
- , 2001b 「境界のこえかた——沖縄・大東島・南洋」 立命館大学『言語文化研究』 Vol.13-1。
- , 2001c 「聴くことの社会学のために——二〇〇〇年五月の“賭け (progetto)”の後に」『地域社会学会年報13』 ハーベスト社。
- , 2001d 「“内なる異文化”への臨床社会学——臨床の“智”を身につけた社会のオペレーターのために」 野口裕二・大沼英昭編『臨床社会学の実践』 有斐閣。
- , 2001e 『多文化・多言語混成団地におけるコミュニティ形成のための参加的調査研究』 科学研究費補助金基盤研究 (C) 報告書 (研究代表者・新原道信)。
- , 2002 「旅」 永井均他編『事典 哲学の木』 講談社。
- , 2003a 「ヘテロトピアの沖縄」 西成彦・原毅彦編『複数の沖縄——ディアスポラから希望へ』 人文書院。
- , 2003b 「自らを見直す市民の運動」 矢澤修次郎編『講座社会学15 社会運動』 東京大学出版会。
- , 2004a 「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ——差異と混沌を生命とする対位法の“智”」 永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』 日本経済評論社。
- , 2004b 「ともに旅をして, 対比・対話し, 考える (Viaggiare, comparare, pensare)」『評論』 No. 143。
- , 2004c 「生という不治の病を生きるひと・聴くことの社会学・未発の社会運動——A・メルッチの未発の社会理論」 東北社会学研究会『社会学研究』 第76号。
- , 2006a 「深層のアウトノミア——オランダ・アイデンティティと島の自治・自立」 古城利明編『リージョンの時代と島の自治』 中央大学出版部。
- , 2006b 「他者を識る旅」 中央大学『中央評論』 No.256。
- , 2006c 「序」 「現在を生きる知識人と未発の社

- 会運動—県営団地の“総代”“世間師”そして“移動民”をめぐる」 「あとがき」新原道信・奥山眞知・伊藤守編『地球情報社会と社会運動—同時代のリフレクシブ・ソシオロジー』ハーベスト社。
- , 2006d 「いくつものもうひとつの地域社会へ」 「あとがき」古城利明監修, 新原道信他編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂。
- , 2007a 『境界領域への旅—岬からの社会学的探求』大月書店。
- , 2007b 『未発の「第二次関東大震災・朝鮮人虐殺」の予見をめぐる調査研究』科学研究費補助金基盤研究(C)調査報告書(研究代表者・新原道信)。
- , 2007c 『21世紀“共成”システム構築を目的とした社会文化的な“島々”の研究』科学研究費補助金基盤研究(B)学術調査報告書(研究代表者・新原道信)。
- , 2008a 『『グローバリゼーション／ポスト・モダン』と『プレイング・セルフ』を読む—A.メルッチが遺したものを再考するために』『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学18号(通巻223号)。
- , 2008b 「訳者あとがき—「瓦礫」から“流動する根”」A.メルッチ, 新原道信他訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社。
- , 2009a 「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐる—古城利明とA.メルッチの問題提起に即して」『法学新報』第115巻, 第9・10号。
- , 2009b 「境界領域のヨーロッパを考える—移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究を通じて」『横浜市大論叢』人文科学系列, 第60巻, 第3号。
- , 2009c 「“生身の現実を観察する”という社会学の実践感覚について」中央大学通信教育部『白門』第61巻第9号。
- , 2010 「A.メルッチの“境界領域の社会学”—2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学20号(通巻233号)。
- , 2011a 『旅をして, 出会い, とともに考える』中央大学出版部。
- , 2011b 「A.メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ—『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学21号(通巻238号)。
- , 2011c 「死者とともにあるということ・肉声を聴くこと—2011年3月の震災によせて」メールマガジン「大月書店通信」第28号(2011.4.26)所収。http://www.otsukishoten.co.jp/files/memento_mori_20110426.pdf, <http://www.otsukishoten.co.jp/news/n2274.html>
- , 2011d 「“境界領域”のフィールドワーク—サルデーニャからコルシカへ」『中央大学社会科学研究所年報』15号。
- , 2011e 「出会うべき言葉だけを持っている—宮本常一の“臨場・臨床の智”」『現代思想 総特集=宮本常一 生活へのまなざし』vol.39-15。
- , 2012a 「現在を生きる『名代』の声を聴く—“移動民の子供たち”がつくる“臨場／臨床の智”」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学22号(通巻243号), 2012年3月。
- , 2012b 「“境界領域”のフィールドワーク(2)—カーボベルデ諸島でのフィールドワークより」『中央大学社会科学研究所年報』16号, 2012年7月。
- Niihara, Michinobu, 1989, “Sardegna e Okinawa: Considerazioni comparative fra due sviluppi insulari,” in *Quaderni bolotanesi*, n.15.
- , 1989, “Alcune considerazioni sulla vita quotidiana e sul processo dello sviluppo. Confronto fra due processi: Giappone Okinawa e Italia Sardegna,” in *Il grandevetro*, n.102.
- , 1992, “Un tentativo di ragionare sulla teoria dell’insularità. Considerazioni sociologiche sulle realtà della società composita e complessa: Sardegna e Giappone,” in *Quaderni bolotanesi*, n.18.
- , 1994, “Un itinerario nel Mediterraneo per riscoprire il Giappone e i giapponesi, Isole a confronto: Giappone e Sardegna,” in *Quaderni bolotanesi*, n.20.

- , 1995, "Gli occhi dell'oloturia." Mediterraneo insulare e Giappone," in *Civiltà del Mare*, anno V, n.6.
- , 1997, "Migrazione e formazione di minoranze: l'altro Giappone all'estero e gli'estranei'in Giappone. Comparazioni col caso sardo," in *Quaderni bolotanesi*, n.23.
- , 1998, "Difficoltà di costruire una società interculturale in Giappone," in *BETA*, n.3.
- , 1999, "Integrated Europe as Viewed from Mediterranean Island" , in T.Miyajima, T.Kajita & M.Yamada (eds.), *Regionalism and Immigration in the Context of European Integration*, JACAS Symposium Series No.8, The Japan Center for Area Studies - National Museum of Ethnology, Osaka, July 1999, pp.63-69.
- , 2003a, "Homines patientes e sociologia dell'ascolto," in Luisa Leonini (a cura di), *Identità e movimenti sociali in una società planetaria: In ricordo di Alberto Melucci*, Milano: Guerini.
- , 2003b, "Il corpo silenzioso: Vedere il mondo dall'interiorità del corpo," in Luisa Leonini (a cura di), *Identità e movimenti sociali in una società planetaria: In ricordo di Alberto Melucci*, Milano: Guerini.
- , 2008, "Alberto Melucci: confini, passaggi, metamorfosi nel pianeta uomo," nel convegno: *A partire da Alberto Melucci ...l'invenzione del presente*, Milano, il 9 ottobre 2008, Sezione Vita Quotidiana - Associazione Italiana di Sociologia, Dipartimento di Studi sociali e politici - Università degli Studi di Milano e Dipartimento di Sociologia e Ricerca Sociale - Università Bicocca di Milano.
- , 2010, "I servizi socio-educativi in Giappone: una comparazione," nel convegno: *Sistema formativo e servizi socio-educativi per le famiglie, per le scuole, per le comunità*, Sassari, il 15 luglio 2010, Laboratorio FOIST per le Politiche Sociali e i Processi Formativi con il patrocinio di Sezione di Sociologia dell'educazione e Sezione di Politica sociale - Associazione Italiana di Sociologia, Università degli Studi di Sassari.
- , 2011, "Crisi giapponese—Consequente al disastro nucleare degli ultimi mesi", nel *Seminario della Scuola di Dottorato in Scienze Sociali*, Università degli Studi di Sassari.
- , 2012, "Il disastro nucleare di FUKUSHIMA. Scelte energetiche, società civile, qualità della vita", nel *Quarto seminario FOIST su Esperienze internazionali nell' università*, Università degli Studi di Sassari.
- Merler, Alberto e Michinobu Niihara, 2011a, "Terre e mari di confine. Una guida per viaggiare e comparare la Sardegna e il Giappone con altre isole", in *Quaderni Bolotanesi*, n.37.
- , 2011b, "Le migrazioni giapponesi ripetute in America Latina", in *Visioni Latino Americane*, Rivista semestrale del Centro Studi per l'America Latina, Anno III, Numero 5.
- Merler, Alberto and Andrea Vargiu, 2008, "On the diversity of actors involved in community-based participatory action research", in *Community-University Partnerships: Connecting for Change: proceedings of the 3rd International Community-University Exposition (CUexpo 2008)*, May 4-7, 2008, Victoria, Canada. Victoria, University of Victoria.
- 奥田道大, 1990 [「訳者解題」, Faris, Robert E.L., with a foreword by Morris Janowitz, 1970, c1967, Chicago sociology, 1920-1932 (The heritage of sociology), Chicago: University of Chicago Press. (= 1990, 奥田道大・広田康生訳『シカゴ・ソシオロジー：1920-1932』ハーベスト社)
- Polanyi, Michael, 1966, *The tacit dimension*, The University of Chicago Press. (= 2003, 高橋勇夫訳『暗黙知の次元』ちくま学芸文庫)
- , 2007, 慶伊富長編訳『創造的想像力 [増補版]』ハーベスト社。
- 最首悟, 1998『星子が居る——言葉なく語りかける重複障害の娘との20年』世織書房。
- 鶴見和子, 1981『南方熊楠——地球志向の比較学』講談社。

Whyte, William Foote, 1982, “Social Inventions for Solving Human Problems: American Sociological Association, 1981. Presidential Address”, *American Sociological Review*, Vol. 47. (= 1983, 今防人訳「人間の諸問題を解決するための社会的発明——アメリカ社会学会, 1981年会長就任演説」, 「社会と社会学」編集委員会編『世界社会学をめざして 叢書 社会と社会学 I』新評論)

——, 1993, *Street Corner Society : The Social Structure of An Italian Slum, Fourth Edition*, The University of Chicago Press. (= 2000, 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣)

吉原直樹, 2011『コミュニティ・スタディーズ——災害と復興, 無縁化, ポスト成長の中で, 新たな共生社会を展望する』作品社。